

岐阜県文化財保護センター

調査報告書 第157集

中切上野1号古墳

2022

岐阜県文化財保護センター

なか ぎり うわ の
中 切 上 野 1 号 古 墳

2022

岐阜県文化財保護センター

序

岐阜県北部の飛騨地方は、豊かな山林と山あいを流れる数々の清流によって育まれた美しい自然のなかにあります。飛騨地方は岐阜県の中でも北陸や中部高地との関わりが深く、古くから各地との交流を盛んにもちつつ豊かな文化を育み続けてきました。遺跡の所在する高山盆地北西部は、牧ヶ洞断層などの影響で南西から北東方向に直線的に伸びる丘陵が特徴であり、眼下に川上川が流れ、市街から続く宮川との合流点も望むことができます。

このたび、国土交通省中部地方整備局高山国道事務所による中部縦貫自動車道高山清見道路事業に伴い、高山市中切町にある中切上野1号古墳の発掘調査を実施しました。今回の調査では、1号古墳と方形周溝墓1基などを確認することができ、古墳時代初め頃に築造されたことが分かりました。当地域には同時期の大規模な墳墓群である上切寺尾古墳群が知られていますが、谷をはさんだ中切地区にも墳墓群があることを確認することができ、地域の歴史を考える上で重要な成果となりました。本報告書が埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、当地の歴史研究の一助となれば幸いです。

最後となりましたが、発掘調査及び出土遺物の整理・報告書作成に当たりまして、御支援・御協力をいただきました関係諸機関並びに関係者各位、高山市教育委員会、地元地区の皆様に深く感謝申し上げます。

令和4年3月

岐阜県文化財保護センター

所長 岡田 知也

例　　言

- 1 本書は、岐阜県高山市中切町に所在する中切上野1号古墳（岐阜県遺跡番号 21203-00441）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、中部縦貫自動車道高山清見道路事業に伴うもので、国土交通省中部地方整備局から岐阜県が委託を受けた。発掘作業及び整理等作業は、岐阜県文化財保護センターが実施した。
- 3 徳田誠志宮内庁書陵部陵墓課陵墓調査官の指導のもとに、発掘作業は令和元年度、整理等作業は令和2年度に実施した。
- 4 発掘作業及び整理等作業の担当は、本書第1章第2節に一括して掲載した。
- 5 本書の執筆は及び編集は、三島誠が行った。
- 6 発掘作業における現場管理、掘削、測量、景観写真撮影、出土遺物の洗浄・注記などの支援業務は、株式会社イビソクに委託して行った。整理等作業における作業管理、出土遺物の整理作業、挿図・写真図版作成などの支援業務は、橋本技術株式会社に委託して行った。
- 7 遺物の写真撮影は、アートフォト右文に委託して行った。
- 8 発掘調査及び報告書の作成に当たって、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である（敬称略・五十音順）。

 - 岩田崇、高橋浩二、田中彰、馬場伸一郎、三好清超、高山市教育委員会
 - 本文中の方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標系第VII系を使用する。
 - 土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄 2014『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。
 - 調査記録及び出土遺物は、岐阜県文化財保護センターで保管している。

目 次

序

例言

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	2
第2章 遺跡の環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	6
第3章 調査の成果	10
第1節 遺跡の基本層序	10
第2節 調査前地形測量成果について	12
第3節 遺構・遺物の概要	13
第4節 古墳時代の遺構と遺物	15
第5節 その他の遺構と遺物	23
遺構一覧表、遺物観察表、発掘区全域図割付図、発掘区全域図分割図	29
第4章 総括	33
第1節 遺構と遺物について	33
第2節 中切上野古墳群について	33
参考・引用文献	
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

図1 遺構位置図	1	図13 SZ2遺構図(2)	21
図2 発掘区地区割り図	2	図14 SZ2出土遺物	22
図3 中切上野1号古墳周辺の地形と地質	5	図15 SD2・SK4遺構図	24
図4 周辺遺跡位置図	8	図16 SD2・SX1出土遺物	24
図5 基本層序の位置	10	図17 SX1遺構図	25
図6 基本層序	11	図18 遺構外出土遺物	26
図7 中切上野1号古墳調査前地形測量図	12	図19 発掘区全地図剖面図	29
図8 1号古墳(SZ1)遺構図(1)	16	図20 III層上面発掘区全地図分割図1	30
図9 1号古墳(SZ1)遺構図(2)	17	図21 III層上面発掘区全地図分割図2	31
図10 1号古墳(SZ1)遺構図(3)	18	図22 III層上面発掘区全地図分割図3	32
図11 1号古墳(SZ1)遺構図(4)、出土遺物	19	図23 中切上野古墳群と周辺遺跡の立地	34
図12 SZ2遺構図(1)	20		

表目次

表1 周辺の遺跡一覧	9	表7 土坑一覧表	27
表2 検出遺構一覧表	14	表8 不明遺構一覧表	27
表3 出土遺物破片数一覧表	14	表9 土器観察表(1)	27
表4 墳墓・方形周溝墓一覧表	27	表10 土器観察表(2)	28
表5 周溝内土坑一覧表	27	表11 石器観察表	28
表6 溝状遺構一覧表	27		

挿入写真目次

写真1 調査前状況(西から)	3	写真4 遺構掘削作業状況	4
写真2 人力による表土掘削状況	3	写真5 景観写真撮影状況	4
写真3 包含層掘削状況	3		

写真図版目次

図版1 発掘区遠景・発掘区近景		図版3 各遺構(2)	
図版2 各遺構(1)		図版4 出土遺物	

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

中切上野1号古墳は、岐阜県北部、飛騨地域の中心都市である高山市に所在し、市街地が広がる高山盆地の北西端に位置する（図1）。

今回の発掘調査は、国土交通省中部地方整備局高山国道事務所（以下、「事務所」という。）による中部縦貫自動車道高山清見道路事業に伴い実施したものである。この道路は、高山市と東海北陸自動車道を結び、高速交通サービスの提供、高山市内の交通混雑の緩和、さらには沿線の文化・観光資源を活かした地場産業振興や観光リゾートとしての地域発展の支援等を目的に計画された一般国道の自動車専用道路である。

事業予定地内に周知の埋蔵文化財包蔵地「中切上野1号古墳」（岐阜県遺跡番号21203-00441）が所在することから、平成30年9月26日に平成30年度第1回岐阜埋蔵文化財発掘調査検討会が開催され、岐阜県発掘調査適用基準に基づき本発掘調査が必要とされた（図2）。

その後、文化財保護法第94条第1項の規定に基づき、事務所長から岐阜県教育委員会教育長（以下、「県教育長」という。）に埋蔵文化財発掘通知（平成31年2月28日付け国部整高計第133号）が提

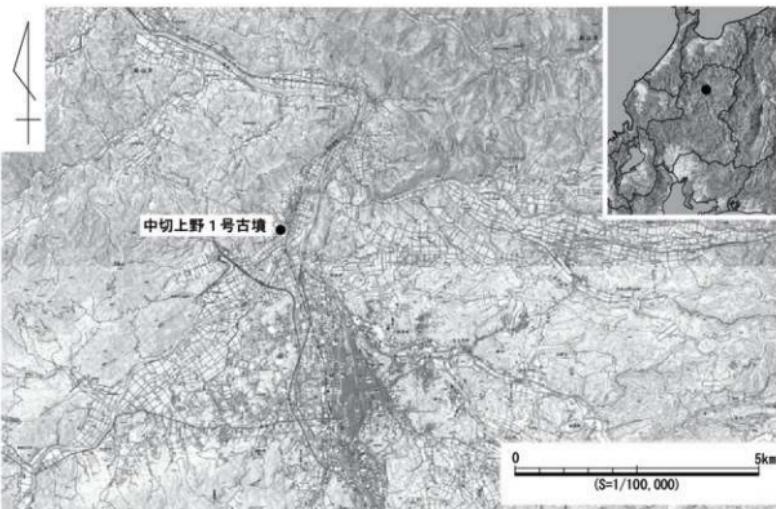


図1 遺跡位置図

（国土地理院発行2万5千分の1地形図 平成23年「高山」、平成29年「町方」、平成30年「飛騨古川」、令和元年「三日町」）を使用

2 第1章 調査の経緯

出され、同条第4項の規定に基づき、県教育長から事務所長あて発掘調査実施勧告（平成31年3月18日付け文伝第84号の195）が通知された。事務所長は、発掘調査の実施を県教育長に依頼し、岐阜県文化財保護センター（以下、「センター」という。）が実施した。センターは調査着手後、発掘調査の報告（令和元年5月10日付け文財セ第95号）を県教育長に提出した。

第2節 調査の方法と経過

1 調査の方法

発掘作業は、令和元年度に191.2 m²を対象に実施した。

発掘区には世界測地系をもとに5m×5mの小グリッド（以下、「グリッド」という。）を設定し、北から南へAからD、西から東へ1から6を設定した（図3）。そのため、発掘区の北西隅のグリッドはA 1、南隅のグリッドはD 3、北東隅のグリッドはA 6となる。

表土掘削は、大型の掘削道具を用いて人力で行った。

遺物包含層掘削・遺構検出・遺構掘削は、ジョレン・草削り鎌などを用いて人力で行った。土坑、墳墓の周溝などの遺構は、土層堆積状況や遺物出土状況等の記録を作成しつつ、最終的に遺構埋土をすべて取り除いた。また、必要に応じて遺構断ち割り調査を実施した。墳丘部分は、十字トレンチを設定し、墳丘盛土の堆積状況や主体部の存在を確認しながら掘削を行った。発掘作業時の遺構番号は検出順の通番とし、S01から付与した。この遺構番号は、整理等作業時に遺構種別ごとに新たな番号を

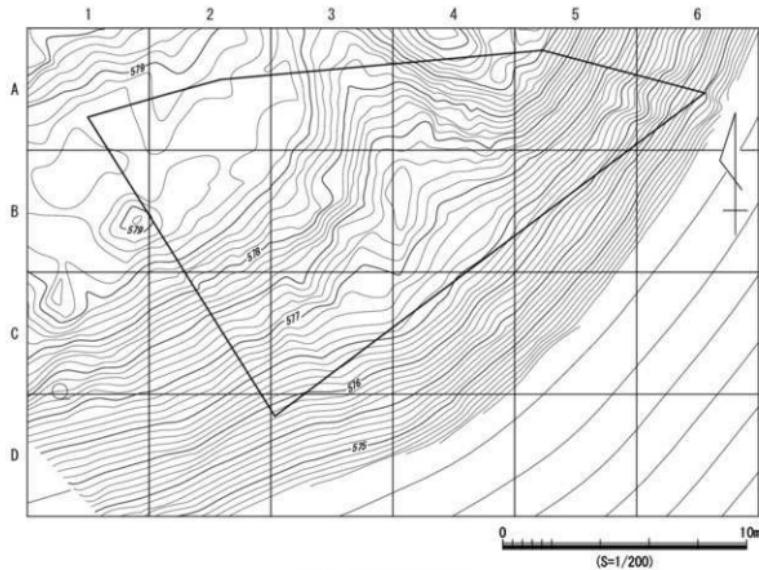


図2 発掘区地区割り図

付けたが、発掘作業時の遺構番号も表4～表8の遺構一覧表に「調査番号」として掲載した。

遺構実測図の作成は、平面図が三次元測量・図化システム、土層断面図は手測りで行った。図面の縮尺は20分の1を基本とし、実測対象によって縮尺を変更した。

写真撮影は、デジタル一眼レフカメラ、コンパクトデジタルカメラで撮影した。遺跡全景写真は、ラジコンヘリコプターにより空中写真撮影を実施した。

遺物の取り上げは、トータルステーションにより三次元座標を測定して行った。遺物が集中して出土した場合は出土状況図を作成した後、出土位置を測定して取り上げた。

出土遺物の洗浄及び注記作業、遺物台帳作成（一次整理作業）は、発掘作業支援業務の一部として飛騨国府事務所で行った。

2 発掘作業の経過

現地での調査経過は以下のとおりである。

発掘作業前の4月17日に現況地形測量を実施した。

第1週（5/7～5/10） グリッド杭打設（5/7）。

人力による表土掘削を開始（5/8）

第2週（5/13～5/17） 遺構検出を開始（5/15）。

中切上野1号古墳の墳丘（SZ1）及び周溝（SZ1-周溝）を検出。1号古墳の周溝（SZ1-周溝）と重複する周溝（SZ2-周溝）を検出（5/17）。

第3週（5/20～5/24） 発掘区西側の遺構検出作業を実施。

第4週（5/27～5/31） SZ2-周溝がSZ1-周溝を切ることを確認。SZ2-周溝の遺構掘削を開始（5/27）。

第5週（6/4～6/7） SZ2及び周溝の遺構掘削を

終了（6/4）。関連指導調査員田中彰氏（高山市史編纂委員）による現地調査指導（6/5）。SZ1-周溝の遺構掘削を開始（6/5）。

第6週（6/10～6/14） SZ1-周溝の遺構掘削作業を継続。



写真1 調査前状況（西から）



写真2 人力による表土掘削状況



写真3 包含層掘削状況

4 第1章 調査の経緯



写真4 遺構掘削作業状況



写真5 景観写真撮影状況

4 調査体制

発掘作業及び整理等作業の体制は、以下のとおりである。

センター所長 小林法良（令和元年度）、森 勝利（令和2年度）

総務課長 加藤武裕（令和元年度）、布施三千代（令和2年度）

調査課長 春日井恒（令和元・2年度）

調査担当主査 澤村雄一郎（令和元年度）

担当調査職員 三島 誠（令和元・2年度）

第7週（6/17～6/21） SZ 1-周溝の遺構掘削作業を終了（6/20）。

第8週（6/24～6/28） ラジコンヘリによる景観写真撮影を実施（6/25）。1号古墳の墳丘断ち割り作業開始（6/27）。

第9週（7/1～7/5） 1号古墳の墳丘断ち割り作業終了（7/1）。1号古墳の墳丘解体作業（7/2、7/3）。墳丘下部調査を実施し、終了（7/3）。全体図校正（7/4）。

第10週（7/8～7/12） 発掘区の埋め戻し作業終了（7/11）。

出土遺物の洗浄、注記等の一次整理作業は、7月12日から7月17日までの期間に飛騨国府事務所で行った。

3 整理等作業の経過

整理等作業はセンター飛騨駐在事務所において令和2年4月から7月まで実施した。高橋浩二氏（富山大学、6月29日）に土師器及び古墳に関する指導を受けた。

第2章 遺跡の環境

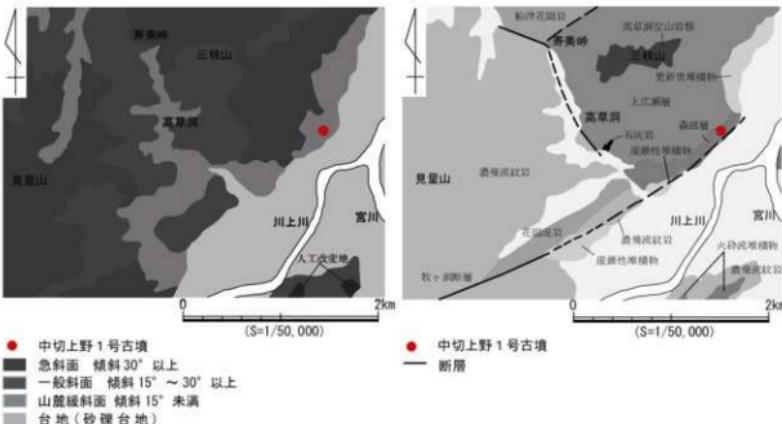
第1節 地理的環境

高山市市街地の北西部には見量山（997m）や三枝山（825m）の山々が連なる。この2つの山の間に高草洞が北西から南東方向へ走り、寿美峠までの直線的な奥行きの深い谷になっている。この谷を流れる高曾洞川が両岸に狭い氾濫原を形成する。

見量山や三枝山の南西側の麓には、国府断層帯の一つである牧ヶ洞断層が北東から南西方向へ直線的に延びる。見量山や三枝山は断層の影響と考えられる凹地や高まり、尾根の屈曲など特徴的な地形が認められる。また、三枝山の南西側は、断層と直交する直線的な谷が走り、細長い半島状の丘陵を形成している。中切上野1号古墳は、この細長い半島状の丘陵端部の緩傾斜地に位置する（図3）。

当遺跡の南側の丘陵下には、崖錐性堆積物による斜面地が形成される。さらに南側は断層と平行して川上川が流れ、川筋を変えながら砂礫を堆積させ、河岸段丘（砂礫台地）を形成する。河岸段丘の中切町の集落と遺跡が立地する丘陵上は約30mの比高があり、遺跡からは眼下に中切町が一望できる。

地質学的には、当遺跡の南西側の見量山山系の基盤は、濃飛流紋岩で形成される。一方、三枝山の基盤は、上広瀬層や森部層のように疊岩・砂岩・凝灰岩・石灰岩・粘板岩・安山岩等で構成され、飛騨外縁帯の一部を形成している。当遺跡内で見られる自然堆積物の多くは、三枝山の基盤層に由来する褐色系の砂質シルトであり、地形の傾斜に沿って堆積する。



地質図(左)は地質調査所『5万分の1地質図(1975「飛騨古川」・1982「三日町」)』を基に作成、地形分類図(右)は『岐阜県「5万分の1土地分類基本調査(地形分類図)(2005「白木峰・古川」・2000「三日町」)』を基に作成した。

図3 中切上野1号古墳周辺の地形と地質

第2節 歴史的環境

当遺跡周辺には、川上川左岸の山麓を中心に遺跡が分布する(図4)。当遺跡周辺では数多くの発掘調査が実施されているため、本節では発掘調査報告書が刊行された遺跡を中心に記載する。文中の遺跡名に続く括弧内の番号は、図4・表1と一致する。

縄文時代の遺跡では、川上川と宮川両岸の丘陵地や河岸段丘上に集中する。日焼遺跡(67)は平成27・28年度にセンターが発掘調査を実施し、早期の煙道付炉穴2基、中期の竪穴建物2軒などを確認した。中切上野遺跡(73)は、平成8年度に高山市教育委員会(以下、「市教委」という。)が発掘調査を実施し¹⁾、早期の集石構造2基と前期の竪穴建物15軒などが検出された。また、同遺跡では平成29・30年度にセンターが発掘調査を実施し、前期と中期の竪穴建物58軒などを検出した。赤保木遺跡(35)では、平成3年度に市教委が発掘調査を実施し²⁾、竪穴建物4軒などが検出された。平成16年度のセンターの発掘調査では、中期の竪穴建物26軒などを検出した。ウバガ平遺跡(52)は、平成13・19年度にセンターが発掘調査を実施し、前期から中期の竪穴建物2軒などを検出した。

弥生時代から古墳時代初頭の遺跡の多くは、縄文時代の遺跡と立地が類似するが、墓域は丘陵尾根部分に展開する。三枝城跡(54)は、平成18・20年度にセンターが発掘調査を実施し、土坑から前期の柴山出土系土器の壺が出土した。赤保木遺跡は、平成16年度に発掘調査を実施し、中期の竪穴建物2軒と古墳時代初頭の竪穴建物4軒を検出し、内壇内式の横羽状文壺や柳描波状文を施す中部高地系の土器が出土した。ウバガ平遺跡の発掘調査では、中期の竪穴建物3軒を検出し、内壇内式の横羽状文壺や栗林式土器の壺、楓田タイプの石斧が出土した。中切上野遺跡では、内壇内式の横羽状文壺3個体分が合わせて1基を検出した。野内遺跡(55)では、平成14年度から17年度にセンターが発掘調査を実施し、D地区では後期の竪穴建物1軒、B地区では後期後半から古墳時代初頭の竪穴建物3軒、C地区で2軒を検出した。上切寺尾古墳群(66)では、後期後半から古墳時代初頭の墳墓51基を検出した。現段階で後期後半の墳墓は飛騨地域における最古の墳墓である。中切上野遺跡では、遺跡内に所在する中切上野5号古墳(5)を調査した他、古墳時代初頭の方形周溝墓1基を検出した。

古墳時代前期から後半の遺跡の分布は見墓山南東部の緩斜面と、川上川左岸と宮川との合流点付近に認められる。集落跡は野内遺跡とウバガ平遺跡で確認した。野内遺跡では、A地区で5世紀代の竪穴建物を54軒、B地区で古墳時代中期から終末期の竪穴建物9軒、D地区で後期の竪穴建物1軒を検出した。ウバガ平遺跡では、前半から後期後半の竪穴建物9軒を検出した。赤保木遺跡³⁾では、中期の竪穴建物1軒を検出した。古墳は、平成4年度に市教委が赤保木ぼた上古墳群(58~64)の5号古墳(62)の範囲確認調査³⁾を行い、埋葬施設が竪穴式石室であることが判明した。冬頭大塚古墳(94)では昭和45年度に市教委が発掘調査⁴⁾を行い、5世紀後半の2段築成の円墳であることが判明した。冬頭山崎1号古墳(90)、冬頭山崎2号古墳(91)、冬頭山崎1号横穴(92)は、平成10年度に県センターが発掘調査を実施した。冬頭山崎2号古墳は5世紀末の2段築成の円墳、冬頭山崎1号古墳は横穴式石室を主体部とする7世紀前半の古墳、冬頭山崎1号横穴は高山盆地北東部以外で初めて発掘調査した横穴で、7世紀代のものであることが判明した。与島3号古墳(46)、与島4号古墳(47)、与島6号古墳(49)は、平成9年度に県センターが発掘調査を実施し、横穴式石室を主体部とする7

世紀中葉の円墳であることが判明した。

古墳時代終わり頃から平安時代にかけては、遺跡数の半分を古窯群が占め、見量山の西麓と寿美峰を越えた国府町瓜巣に集中する。日焼遺跡では、古墳時代終末期から奈良時代にかけて竪穴建物 35 軒、掘立柱建物 3 棟を検出した。また、仏堂と考えられる 10 世紀前半の掘立柱建物 1 棟や礎石建物 1 棟を検出した。三枝城跡では、9 世紀前半から 10 世紀前半の礎石建物を検出した。三枝城跡の南麓にある野内遺跡B地区では、竪穴建物 45 軒と掘立柱建物 4 棟、鍛冶関連遺構 30 基を検出した。また、野内遺跡C地区では、古代の水田を検出した。ウバガ平古墳群（50）では、7 世紀末から 8 世紀初頭と考えられる終末期の円墳 4 基を検出した。飛騨国分寺跡（118）が昭和 61 年度に市教委により範囲確認調査⁵⁾を実施され、軒丸瓦、軒平瓦、平瓦、鬼瓦などが出土した。飛騨国分尼寺跡（101）は、昭和 63 年度に市教委により範囲確認調査⁶⁾が実施され、礎石建物が確認された。古窯跡では、市教委が昭和 48 年度に赤保木 1 ~ 6 号古窯（32）を発掘調査⁷⁾を実施し、6 基の窯を確認した。1 ~ 4 号窯は瓦窯で、飛騨国分寺と飛騨国分尼寺に瓦を供給していたことが明らかとなった。赤保木 8 号古窯跡（25）では、平成 13 年度に市教委が発掘調査⁸⁾を実施し、窯体に伴う遺構は確認できなかったが、10 世紀初頭の灰釉陶器が出土した。平野 1 号古窯跡（22）は平成 15 年度に市教委が発掘調査⁹⁾を実施し、8 世紀前半の須恵器を生産した窯であることが判明した。

中世では、城館跡 6 箇所、社寺跡 1 箇所、集落跡 1 箇所である。平野部を見下ろす尾根上に分布するのが特徴である。三枝城跡は、平成 18・20 年度に県センターが発掘調査を実施し、主郭西側に二重の堀切がある山城で、寿美峰方面からの進入に対する監視・防御的な性格を持つことが判明した。冬頭城跡（93）は平成 10 年度に県センターが発掘調査を実施し、尾根上に簡素な切岸や削平地などの防護施設を有する山城であることが判明した。野内遺跡D地区では、12 世紀後半~13 世紀前半の四面庇建物 2 軒を検出した。

注

- 1) 高山市教育委員会 1998『中切上野遺跡発掘調査報告書』
- 2) 高山市教育委員会 1993『前平山陵遺跡 赤保木遺跡発掘調査報告書』
- 3) 高山市教育委員会 1995「1 赤保木 5 号古墳」『高山市内遺跡発掘調査報告書』
- 4) 高山市教育委員会 1971『冬頭大塚古墳発掘調査報告書』
- 5) 高山市教育委員会 2001「4 飛騨国分寺跡」『高山市内遺跡発掘調査報告書』
- 6) 高山市教育委員会 1990『飛騨国分尼寺発掘調査報告書』
- 7) 高山市教育委員会 1975『飛騨国分寺瓦窯発掘調査報告書』
- 8) 高山市教育委員会 2005「4 赤保木 8 号古窯跡」『高山市内遺跡発掘調査報告書』
- 9) 高山市教育委員会 2005「10 平野遺跡・平野 1 号古窯跡」『高山市内遺跡発掘調査報告書』

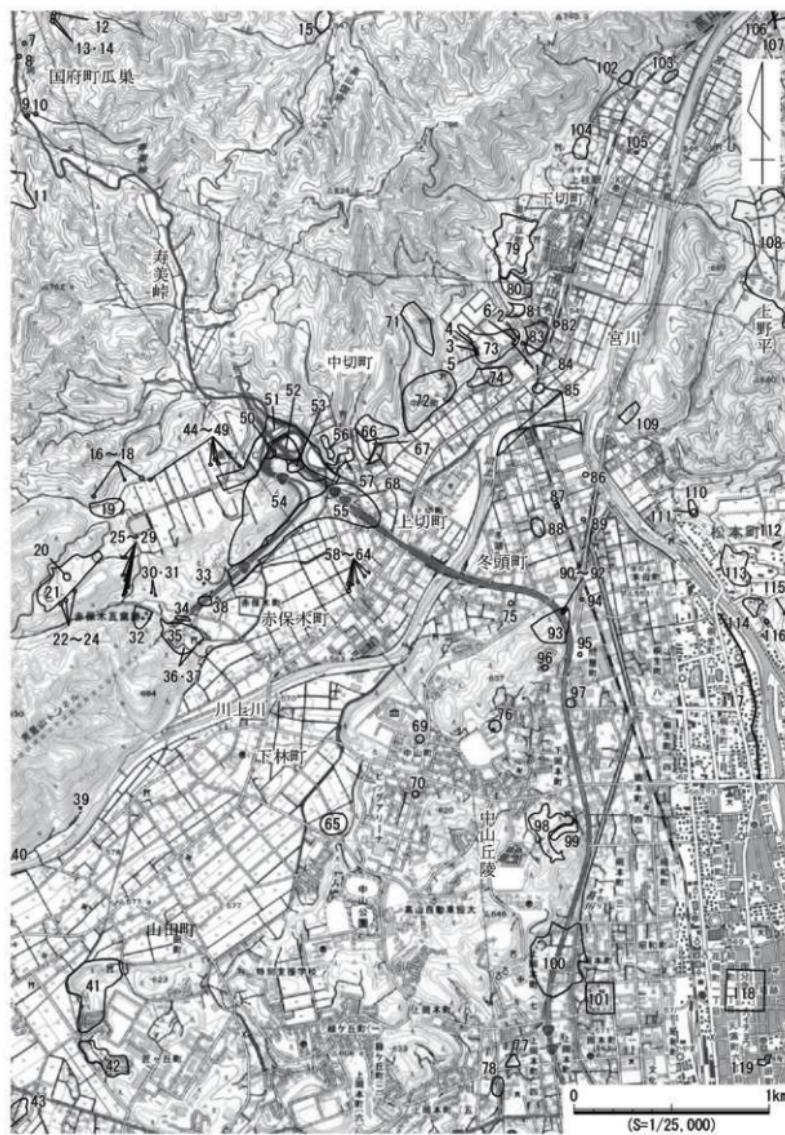


図4 周辺遺跡位置図

表1 周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	中切上野1号古墳	古墳	古墳	61	赤保木ぼた上4号古墳	古墳	古墳
2	中切上野2号古墳	古墳	古墳	62	赤保木ぼた上5号古墳	古墳	古墳
3	中切上野3号古墳	古墳	古墳	63	赤保木ぼた上6号古墳	古墳	古墳
4	中切上野4号古墳	古墳	古墳	64	赤保木ぼた上7号古墳	古墳	古墳
5	中切上野5号古墳	古墳	古墳	65	下林遺跡	散布地	弥生
6	中切上野6号古墳	古墳	古墳	66	上切寺尾古墳群	その他の墓・古墳	弥生・古墳
7	瓜栗中島古窯跡	生産遺跡	白鳳	67	日向遺跡	集落跡・社寺跡	鐵文・弥生・奈良・平安
8	瓜栗小坂古窯跡	生産遺跡	白鳳	68	上切(桜木)遺跡	散布地	平安
9	わづ洞石炭窓跡	生産遺跡	近世	69	竹ヶ洞A地点道路	散布地	鐵文
10	瓜栗わざ洞古窯跡	生産遺跡	奈良	70	竹ヶ洞B地点道路	散布地	鐵文
11	上り洞遺跡	散布地	鐵文	71	中切城跡	城館跡	中世
12	瓜栗大洞1号古墳	古墳	古墳	72	中切前平城跡	城館跡	鎌倉・室町・安土桃山
13	瓜栗大洞1号古窯跡	生産遺跡	平安	73	中切上野遺跡	集落跡	鐵文・弥生・古墳・奈良・平安
14	瓜栗大洞2号古窯跡	生産遺跡	平安	74	中切遺跡	古墳	鐵文・弥生・奈良
15	後岡遺跡	散布地	鐵文	75	大岡塙古墳	古墳	古墳
16	よしま1号古窯跡	生産遺跡	平安	76	中山古窯跡	生産遺跡	平安
17	よしま2号古窯跡	生産遺跡	平安	77	腰宮田遺跡	散布地	弥生・奈良
18	よしま3号古窯跡	生産遺跡	平安	78	西ノ山遺跡	散布地	弥生・奈良
19	与島A地点遺跡	散布地	鐵文	79	下切遺跡	散布地	鐵文・弥生
20	上切平野古墳群	古墳	古墳	80	宮野田地点遺跡	散布地	鐵文・弥生
21	平野遺跡	散布地	鐵文	81	中切官ノ平遺跡	散布地	鐵文・吉墳
22	平野1号古窯跡	生産遺跡	平安	82	中切B塙古墳	古墳	古墳
23	平野2号古窯跡	生産遺跡	平安	83	中切C塙遺跡	散布地	鐵文・奈良
24	平野3号古窯跡	生産遺跡	平安	84	日隈(奥境寺)古窯跡	生産遺跡	奈良
25	赤保木8号古窯跡	生産遺跡	奈良	85	四十九塙庵	社寺跡	弥生・白鳳
26	赤保木9号古窯跡	生産遺跡	奈良	86	上ノ原古墳	古墳	古墳
27	赤保木10号古窯跡	生産遺跡	奈良	87	東田古墳	古墳	古墳
28	赤保木11号古窯跡	生産遺跡	奈良	88	冬頭遺跡	散布地	鐵文・弥生
29	赤保木12号古窯跡	生産遺跡	奈良	89	流れ田古墳	古墳	古墳
30	下のせ尾1号古墳	古墳	古墳	90	冬頭山崎1号古墳	古墳	古墳
31	下のせ尾2号古墳	古墳	古墳	91	冬頭山崎2号古墳	古墳	古墳
32	赤保木古窯跡群	生産遺跡	奈良	92	冬頭山崎1号横穴	横穴墓	古墳
33	西高屋裏巖山古墳	古墳	古墳	93	冬頭城跡	城館跡	室町
34	赤保木7号古窯跡	生産遺跡	平安	94	冬頭大塚古墳	古墳	古墳
35	赤保木遺跡	集落跡	鐵文	95	下岡本遺跡	散布地	奈良・平安
36	ミヨガ平1号古墳	古墳	古墳	96	冬頭竹の森遺跡	散布地	平安
37	ミヨガ平2号古墳	古墳	古墳	97	下岡本(漸木)遺跡	散布地	鐵文・弥生・古墳・白鳳
38	赤保木本郷寺遺跡	散布地	鐵文	98	中山城跡	城館跡	室町
39	川上川左岸1号古墳	古墳	古墳	99	下岡本神田遺跡	散布地	平安
40	下之切遺跡	散布地	鐵文	100	古齋遺跡	散布地	平安
41	山田城跡	城館跡	室町	101	幾鄭郡分寺跡	社寺跡	奈良
42	糸瀬遺跡	散布地	鐵文・弥生	102	恵高廢寺跡	社寺跡	鐵文・室町
43	打畠遺跡	散布地	鐵文・弥生	103	の場遺跡	散布地	奈良
44	与島1号古墳	古墳	古墳	104	下切戸谷遺跡	散布地	奈良
45	与島2号古墳	古墳	古墳・近世	105	下切古墳	古墳	古墳
46	与島3号古墳	古墳	古墳	106	三川合遺跡	散布地	鐵文
47	与島4号古墳	古墳	古墳	107	三川舎中街道	その他の遺跡	近世
48	与島5号古墳	古墳	古墳	108	松本上野遺跡	散布地	鐵文
49	与島6号古墳	古墳	古墳	109	茂島古墳	古墳	古墳
50	ウツガ平古墳群	古墳	古墳	110	前平山根遺跡	散布地	鐵文・弥生
51	与島古地点遺跡	散布地	奈良	111	前平古墳	古墳	古墳
52	ウツガ平遺跡	集落跡	鐵文・弥生・古墳・平安	112	西ヶ洞古墳	古墳	古墳
53	与島C地点遺跡	散布地	古代	113	前平遺跡	散布地	鐵文・弥生
54	三枝城跡	城館跡	弥生・古代・室町	114	上頸遺跡	散布地	鐵文
55	野内道路	集落跡	鐵文・弥生・古墳・奈良・平安・中世	115	牧ヶ洞古墳	古墳	古墳
56	隨縁寺裏A地点遺跡	散布地	鐵文	116	馬場古墳	古墳	古墳
57	隨縁寺裏B地点遺跡	散布地	鐵文・弥生・奈良	117	越中街道	その他の遺跡	近世
58	赤保木ぼた上1号古墳	古墳	古墳	118	幾鄭郡分寺跡	社寺跡	奈良
59	赤保木ぼた上2号古墳	古墳	古墳	119	鶴/前遺跡	散布地	奈良
60	赤保木ぼた上3号古墳	古墳	古墳				

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の基本層序

発掘作業前の発掘区の土地利用状況は山林で、発掘区は南東方向に下がる傾斜地に位置する。

基本層序は、中切上野遺跡の調査成果からⅠ層からⅢ層を設定した。Ⅰ層はⅠa層とⅠb層がある。Ⅰa層は表土層で黒褐色のしまりや粘性がない腐植土である。Ⅰb層は尾根上や傾斜地上部から流れで堆積したもので、色調は暗褐色土や褐色で、粘性やしまりがややある土である。今回の調査では、Ⅲ層上や造構埋土・盛土上に堆積することを確認した。Ⅱ層は縄文時代の遺物包含層及び墳丘盛土下層で確認した旧表土である。Ⅱ層はⅡa層とⅡb層がある。Ⅱa層は黒褐色で粘性やしまりがややある土で、層厚は0.2mから0.3mある。古墳築造前の表土層で縄文時代の遺物が出土した。Ⅱb層は暗褐色土で粘性やしまりがややある土で、層厚は薄く0.1m前後である。縄文時代の遺物が出土した。Ⅲ層は基盤層で、褐色の粘性やしまりがややある土である。

図6に、各地点での基本層序を柱状模式図で示した。基本層序4では基盤層（Ⅲ層）が谷状に落ちこみ、そこににぶい黄褐色や暗褐色土が堆積する。谷状に落ち込んだ部分は、調査当初墳丘の周溝である可能性も考えたが、Ⅱb層下で確認していることや、基本層序5では認められないこと、基本層序1で1号古墳の墳丘盛土下層に見られる基本層序Ⅱa層が認められないことから、自然地形と判断

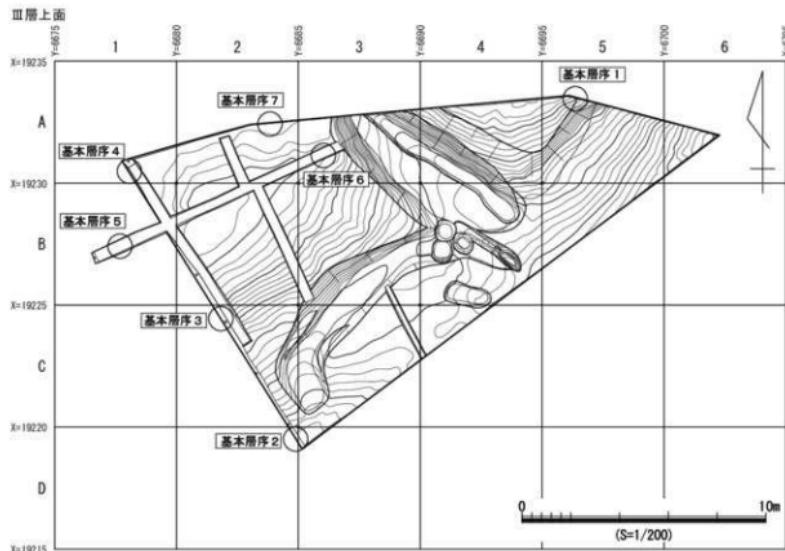


図5 基本層序の位置

した。以上のことから、発掘区の北西隅は谷状であった地形が、土砂の堆積により埋没したと考えられる。その他の場所は、基盤層(Ⅲ層)の変更がないことや表土・流土層が傾斜に沿って堆積することが確認できたことから、近年の土地改変をあまり受けていない場所と理解できる。

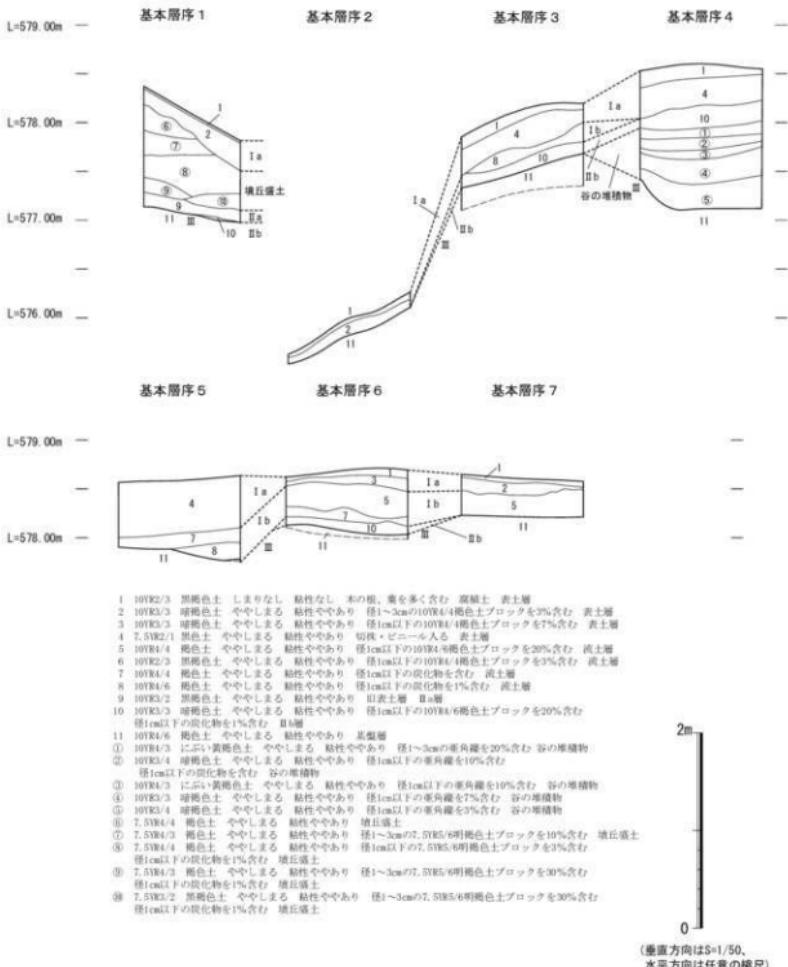


図6 基本層序

第2節 調査前地形測量成果について

中切上野古墳群は、高山市が刊行した遺跡地図（高山市教育委員会 1995）に「中切上野古墳群」として6基が登載される。田中彰氏によると、「これらの古墳の時期は7世紀代で、円墳、マウンドは低く、中央にくぼみがあつて盗掘されている。」¹⁾とされている。令和元年6月7日に遺跡地図の執筆・編集担当者であった田中彰氏とともに、調査前に作成した現況地形測量図を基に、現地にて2号・6号古墳の照合を行った。図7のとおり1号と並ぶように2号・6号古墳があり、それぞれの墳丘は地形測量図の等高線に表れている。また、発掘区外にも複数の起伏が認められ、同様の遺構群である可能性がある。なお、発掘区内に新たにSZ2を確認したが、地形測量図の等高線に表れず、調査前の現況でも起伏は確認できなかった。

注

1) 田中彰 2001 「飛騨地域の古墳」『美濃・飛騨の古墳とその社会』、同成社

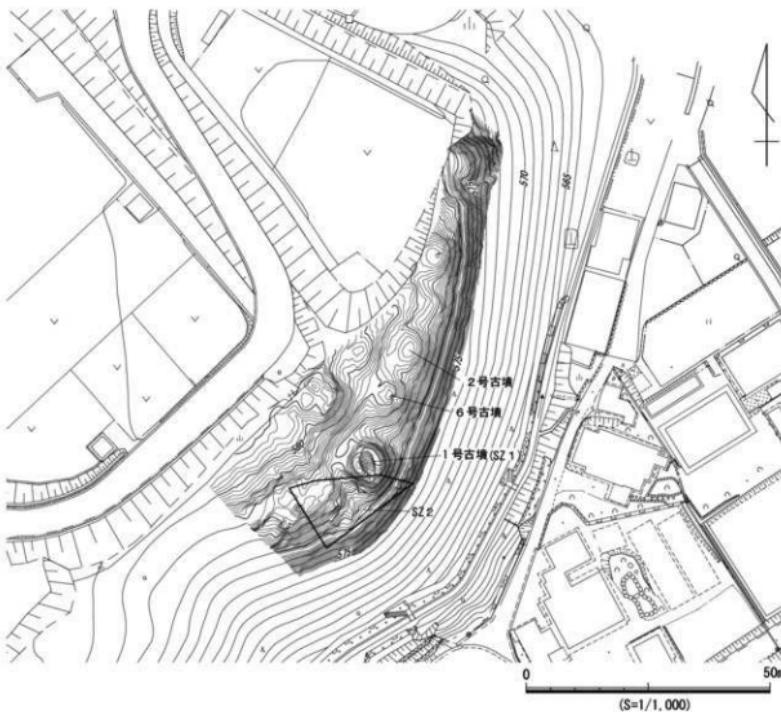


図7 中切上野1号古墳調査前地形測量図

第3節 遺構・遺物の概要

1 遺構の概要

今回の調査では、1号古墳の他に方形周溝墓1基、周溝内土坑1基、溝状遺構2条、土坑4基、不明遺構1基を確認した。報告に当たり、新たに遺構種別ごとの通番(遺構番号)を与えた。遺構の種類、遺構記号(括弧内)、分類内容は、以下のとおりである。

墳墓・方形周溝墓(SZ) 溝によって方形に区画したと思われる遺構。1号古墳は、基盤層の削り出しは行われていないものの、溝状に掘削した排土を利用して墳丘を構築しており、同地域に存在する上切寺尾古墳群の墳墓と類似する。なお、周溝底面で検出した土坑については「周溝内土坑」とした。

1号古墳の南西側で検出した遺構(SZ2)は、墳丘盛土層及び旧表土層がない。溝は傾斜地の下方を除いた部分を掘削しており、この排土を利用して墳丘を構築している可能性があるものの盛土層があったかは不明である。このため、SZ2は「方形周溝墓」と記載する。

溝(SD) 長細い平面形をもつ遺構で上端の短軸に対して長軸が5倍以上あるもののうち、他の遺構の付属遺構でないもの。

土坑(SK) 地面に掘り窪められた穴のうち、明確に性格づけができないもの。

不明遺構(SX) 墳丘構築以前に埋没した遺構で墳丘構築過程との関係性を見いだせなかった遺構。

検出したすべての遺構の位置や規模などの基礎情報は、種別毎に作成した遺構一覧表に示した。遺構の種別により一覧表の項目は異なるが、内容は次のとおりである。

規模 上端及び下端での長軸長と短軸長、深さを表記し、()は残存長を示す。

長軸方位 墳墓や周溝内土坑、不明遺構などは、長軸の傾きを表記した。

遺構属性分類 溝状遺構や土坑や不明遺構は以下のように表記した。

堆積状況 次のようにアルファベットと数字で表記した。

a 単層 b 1 水平堆積 b 2 中央がU字状に窪む堆積が認められるもの

b 3-堆積の窪みが一方の掘方壁面に偏るもの

断面形状 遺構の断面形は、断面の形状(A~E)と、深さと底面での短軸長との比(1~6)、底面(a~d)と壁面(1~5)の状況に下記のとおり分類して記述した。

A-丸い B-平ら C-尖る D-プラスコ状に広がる

1 1 : 0.3 未満 2 1 : 0.7 未満 3 1 : 1.1 未満 4 1 : 1.5 未満

5 1 : 1.5 以上 6 不明

a 丸いか平ら b 底面が2段になる c 底面が凹凸 d 不明

1 壁が開く 2 壁が直立に近い 3 壁面に段がある 4 袋状に広がる 5 不明

出土遺物 以下のとおり記号化して表記した。1号古墳及びSZ2の周溝から出土し復元できた2個体分の土器は古墳時代初頭(白江式)のものであるが、本報告書では、弥生時代末~古墳時代初頭の土器は分類上「弥生土器」として報告した。

J: 繩文土器 Y: 弥生土器 H: 土師器 P: 須恵器 K: 灰釉陶器 T: 陶磁器

S: 石器・石製品類

2 遺物概要

縄文時代から中世までの遺物が295点出土した。遺物の種類と点数は表3のとおりである。縄文土器と石器は、1号古墳(SZ1)及びSZ2の周溝、SX1、I・II層から出土した。弥生土器の大半は1号古墳(SZ1)及びSZ2の周溝、SD2といった遺構埋土から出土した。土師器はI層から出土した。須恵器は1号古墳(SZ1)及びSZ2の周溝やI層やII層から出土した。周溝の須恵器は上層出土であり、埋没時期を示す資料である。灰釉陶器と磁器はI層から出土した。遺物の器種や時期の判断については、以下の文献を参考にしたほか¹⁾、高橋浩二氏、徳田誠志氏から指導・助言をいただいた。

図示した遺物の出土位置や大きさなど基礎的な情報は、種類別に遺物観察表・一覧表に示した。遺物の種別により観察表の項目は異なるが、共通する項目の内容は次のとおりである。

出土位置 遺物が出土したグリッド若しくは遺構を記入した。

層位 遺構以外の遺物包含層などから出土した場合は基本層序番号を、遺構から出土した場合は人口層位(5cm毎にa層・b層・c層・・・として取り上げ)若しくは分層した土層番号(1層・2層・3層・・・として取り上げ)をアルファベットや数字で記入した。

大きさ 「口径」・「器高」・「長さ」・「幅」・「厚さ」などの単位はcmである。また石器類の質量の単位はgである。土器の口径・底径・器高のうち、()で示した大きさは、図上復元した際の数値である。石器・石製品の「長さ」・「幅」・「厚さ」のうち、()で示した大きさは、欠損した残存値である。

石材 石器・石製品については、肉眼観察により石材を判断した。

表2 検出遺構一覧表

時代	S Z	周溝内土坑	SD	SK	S X	合計
縄文時代～弥生時代	0	0	0	0	1	1
弥生時代末～古墳時代初頭	2	1	0	0	0	3
不明	0	0	2	4	0	6
合計	2	1	2	4	1	10

表3 出土遺物破片数一覧表

種別	1号古墳(SZ1)										その他の 総数	
	S Z	SZ2	SD1	SD2	SK1	SK2	SK3	SK4	SX1			
土器類	縄文時代	縄文土器	28	10	0	0	0	0	0	14	74	126
	弥生時代末～古墳時代初頭	弥生土器	23	24	0	2	0	0	0	0	2	51
	古代	土師器	0	0	0	0	0	0	0	0	7	7
		須恵器	5	1	0	0	0	0	0	0	35	41
		灰釉陶器	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
	中世	中国産磁器	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
石器類	小計		56	35	0	2	0	0	0	14	120	227
	縄文時代		27	5	0	0	0	0	0	3	33	68
	総数		83	40	0	2	0	0	0	17	153	295

注

1) 参考にした文献は以下のとおりである。

赤塚次郎 2005「第1章第3節 時期区分」『愛知県史 資料編3 考古3 古墳』、愛知県

小林達雄 1988『縄文土器大観 第2巻 中期I』、小学館

小林達雄 1988『縄文土器大観 第3巻 中期II』、小学館

高橋浩二 2000「古墳出現期における越中の土器様相—弥生時代後期から古墳時代前期前半土器の編年的位置付け」『庄内式

土器研究』XXII、庄内式土器研究会

第4節 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構として、1号古墳（SZ1）、方形周溝墓1基（SZ2）を報告する。

1号古墳（SZ1）（図8～図11）

検出状況 周知の遺跡である中切上野1号古墳の南部を調査した。A4～B5グリッドのIIa層上面で検出した。発掘区の南東側に下る傾斜地に立地し、現況地形測量において方形の墳丘及び周溝を確認した。SZ2の周溝と先後関係があり、SZ2より古Ⅴ。

方台部 墳丘の平面形は南西隅が角張るため、方形と考えられる。墳丘の各辺に直交するようにL字形にトレンチを2箇所設定し、墳丘盛土の堆積状況を観察した。C断面では旧表土（11層）上に10層を地形の傾斜に沿って盛土し、7・8層を堤状、その内側に4・5層を充填する。B断面では、水平な盛土9・10層が認められる。盛土の色調は4～6・8・10層は褐色であり、基盤層（III層）、7・9層は黒褐色土であり、旧表土層に類似する。墳丘中央は発掘区外となるためか、封土及び主体部は確認できなかった。

周溝 検出した周溝の南東側にSX1が存在するが、墳丘構築以前に埋没した遺構の可能性があること、SX1の東半分が発掘区外で様相が不明であることから、周溝とせずにSX1として分離した（第5節SX1で詳述）。現況地形測量でも墳丘の周間に直線的な溝状の窪みを確認した。北西から南西方向に直線的に設置されており、断面は逆台形に近い。埋土は8層に分層した。①～③層は墳丘の外側、④層から⑥は墳丘側に堆積することから、上層①～③層の黒褐色土はIIa層が主に墳丘外から流出した堆積、下層の④～⑥層の暗褐色土は主に墳丘から流出した堆積土と考えられる。なお、溝の底面全体に⑧層が堆積する墳丘に沿う掘り込みを確認した。基盤層に類似する埋土のため掘り過ぎた可能性もあるが、周溝の長軸方位が揃うことから墳丘構築当初に掘削された周溝を埋め戻した可能性もある。周溝の幅は3.2m～3.6mであり、溝中央の幅が広く、北側の溝に繋がる部分がやや狭い。深さは最大1.16mである。周溝内の底面で埋葬施設と考えられる周溝内土坑を確認した。平面形は長方形で、埋土は2層で水平に堆積する。1・2層ともに褐色ブロック土を多く含むことから人為的に埋め戻した可能性が高い。周溝内土坑内では遺物は出土しなかった。

遺物出土状況 墳丘盛土からは縄文土器6点、石器9点が出土した。出土状況は平面的にはまとまりがないが、8層から多く出土した。周溝内からは縄文土器22点、弥生土器23点、須恵器5点、石器27点が出土した。縄文土器と石器の出土状況は平面的にはまとまりがないが、⑤層から⑦層にかけて多く出土した。須恵器（3）は図10の出土状況のとおり、溝のやや北西側で出土した。すべて2層から出土していることから、周溝が完全に埋没せず、窪地になった部分に流れ込んだものと思われる。弥生土器は壺（1）が底面から若干浮いた状態でまとめて出土した。壺（2）は底面付近で出土した。

出土遺物 1・2は弥生土器である。1は壺で胴部外面にミガキ調整が認められる。底部外面は窪む。北陸地方の月影式から古府クルビ式にかけて、壺は平底から丸底へと変化する。1の底部外面には窪みがあり、これを平底の名残りと考えれば、白江式に比定できる資料といえる¹⁾。2も壺である。2は1と接合関係はないが、出土位置が近く、胎土や調整も類似することから同一個体の可能性が高い。3は須恵器の蓋である。天井部は回転ヘラケズリ調整を施し、端部は直線的に短く折り返す。4は縄

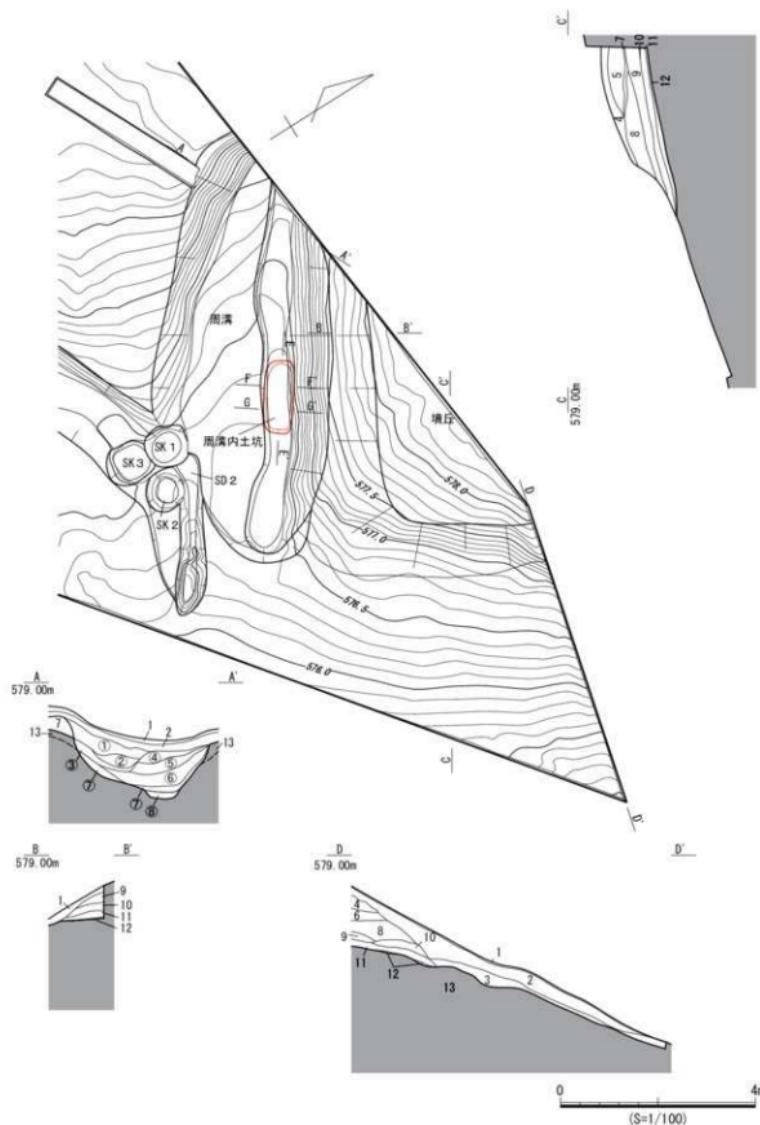
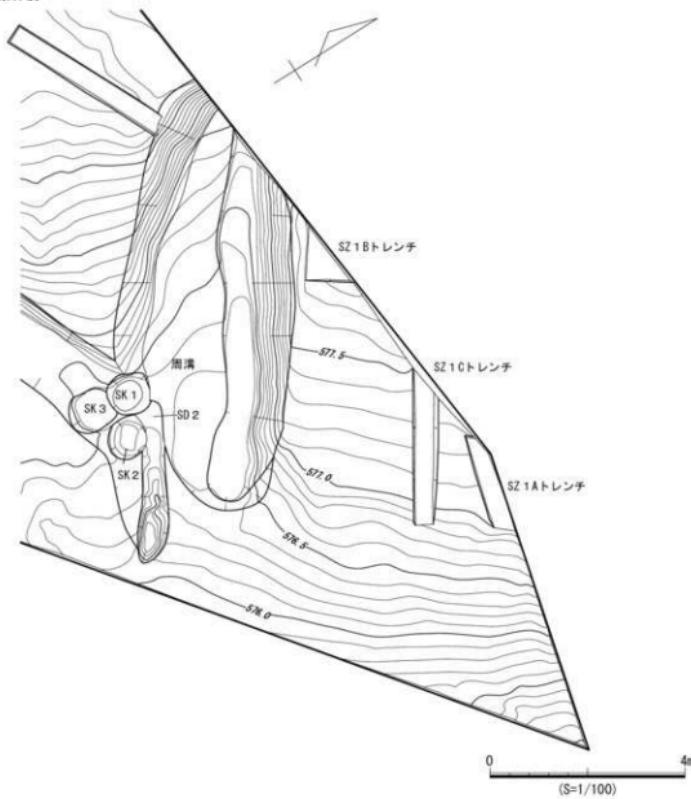


図8 1号古墳 (SZ 1) 遺構図 (1)

墳丘解体後



- 1 10W2/3 黒褐色土 やしらなし 黏性なし 木の根、葉を多く含む 周底土 表土層
 2 10W2/3 黒褐色土 やしらまろ 黏性ややあり 1cm以下10W4/4褐色土ブロックを2%含む 表土層
 3 10W2/3 黒褐色土 やしらまろ 黏性ややあり 1cm以下10W4/4褐色土ブロックを5%含む 流土層
 4 10W4/4 黒色土 やしらまろ 黏性ややあり 1cm以下10W4/4褐色土ブロックを1%含む 墓室壁
 5 10W4/4 黒色土 ややしらまろ 黏性ややあり 1cm以下10W4/4褐色土ブロックを1%含む 墓室壁
 6 10W4/3 黒褐色土 やしらまろ 黏性ややあり 1cm以下10W4/4褐色土ブロックを1%含む 墓室壁
 7 10W4/2 黒褐色土 やしらまろ 黏性ややあり 1cm以下10W4/4褐色土ブロックを1%含む 墓室壁
 8 10W4/4 黒褐色土 やしらまろ 黏性ややあり 1cm以下10W4/4褐色土ブロックを2%含む 1cm以下10W4/4褐色土ブロックを1%含む 墓室壁
 9 10W4/2 黒褐色土 やしらまろ 黏性ややあり 1cm以下10W4/4褐色土ブロックを30%含む 1cm以下10W4/4褐色土ブロックを1%含む 墓室壁
 10 10W4/3 黒褐色土 やしらまろ 黏性ややあり 1cm以下10W4/4褐色土ブロックを20%含む 1cm以下10W4/4褐色土ブロックを1%含む 墓室壁
 11 10W4/2 黒褐色土 やしらまろ 黏性ややあり 1cm以下10W4/4褐色土ブロックを1%含む 日暮 地表層
 12 10W4/3 黒褐色土 やしらまろ 黏性ややあり 1cm以下10W4/4褐色土ブロックを1%含む 日暮
 13 10W4/4 黒褐色土 やしらまろ 黏性ややあり 素面層
 ① 10W2/3 黑褐色土 やしらまろ 黏性ややあり 1cm以下10W4/4褐色土ブロックを7%含む 周底土
 ② 10W2/2 黑褐色土 やしらまろ 黏性ややあり 1cm以下10W4/4褐色土ブロックを2%含む 周底土
 ③ 10W2/3 黑褐色土 やしらまろ 黏性ややあり 1cm以下10W4/4褐色土ブロックを15%含む 周底土
 ④ 10W3/3 黑褐色土 やしらまろ 黏性ややあり 1cm以下10W4/4褐色土ブロックを3%含む 周底土
 ⑤ 10W3/3 黑褐色土 やしらまろ 黏性ややあり 1cm以下10W4/4褐色土ブロックを10%含む 周底土
 ⑥ 10W3/3 黑褐色土 やしらまろ 黏性ややあり 1cm以下10W4/4褐色土ブロックを20%含む 周底土
 ⑦ 10W3/3 黑褐色土 やしらまろ 黏性ややあり 1cm以下10W4/4褐色土ブロックを29%含む 1cm以下10W4/4褐色土ブロックを1%含む 周底土
 ⑧ 10W4/4 黑褐色土 やしらまろ 黏性ややあり 1cm以下10W4/4褐色土ブロックを29%含む 1cm以下10W4/4褐色土ブロックを1%含む 周底土

図9 1号古墳 (SZ 1) 遺構図 (2)

文土器で半広の連続爪形文の間に三角印刻を施す。5は下呂石製の石核である。表面と裏面を作業面・打面を交替しながら剥離を行い、残核は両面調整体となる。

時期 1・2の弥生土器は溝の底面付近でまとまって出土していることから、溝が次第に埋没する段階の資料と考えられる。1は北陸地方の白江式に比定できることから、古墳時代初めに位置付けられる。重複関係にあるSZ 2も、出土遺物から大きな時期差はないものと思われる。

遺物出土状況図

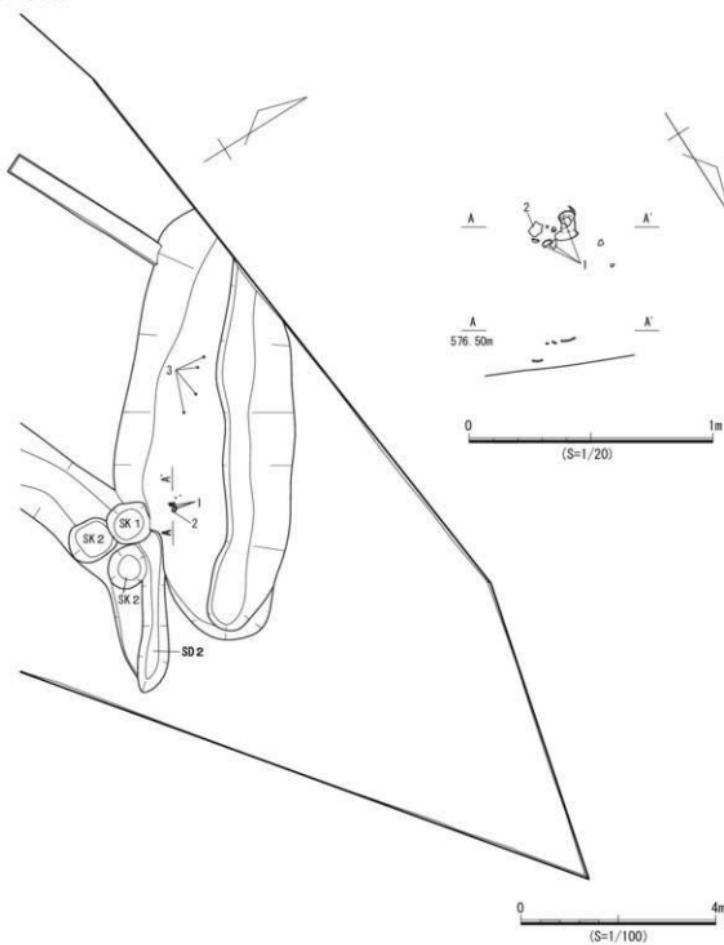


図10 1号古墳 (SZ 1) 遺構図 (3)

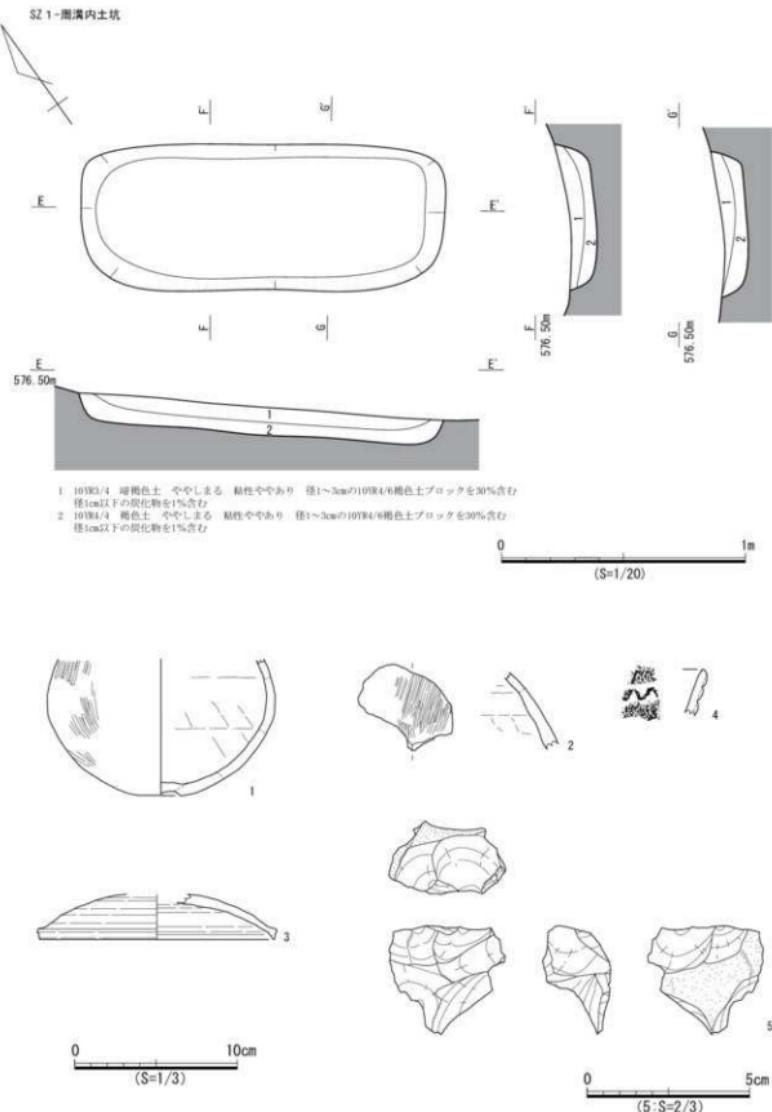


図 11 1号古墳 (SZ 1) 遺構図 (4)、出土遺物

SZ 2 (図12~図14)

検出状況 1号古墳の南西側のB 4~C 4 グリッドのII b層（5層）上面で検出した。発掘区の南東側に下る傾斜地に立地し、現況地形測量において墳丘及び周溝は確認できなかった。1号古墳の周溝と先後関係があり、1号古墳より新しい。

方台部 平面形は傾斜の下方で周溝が途切れる。周溝は直線的であるがやや屈曲する。また、北東隅や北西隅は角張るもの直角に屈曲せずにやや外側に開くため、不整方形又は不整円形と考えられる。表土下で周溝を検出した。周溝と直交するようにL字形にトレーナーを2箇所（A・B断面）設定した結果、北溝掘方の内側にわずかであるが、5層（II b層）上に堆積する4層を確認した。4層は5層と同じ暗褐色土で、基盤層に類似する褐色土ブロックを含む。墳丘盛土層の一部が下方へ流れずに残存した可能性も考えたが、下層に旧表土層がないことや4層の平面的な広がりを確認できなかったことから周溝削削以前の堆積と判断した。周溝の内側では、主体部は確認できなかった。

周溝 傾斜に対して直交する方向の溝と平行する方向の溝がある。傾斜に対して直交する方向の溝は

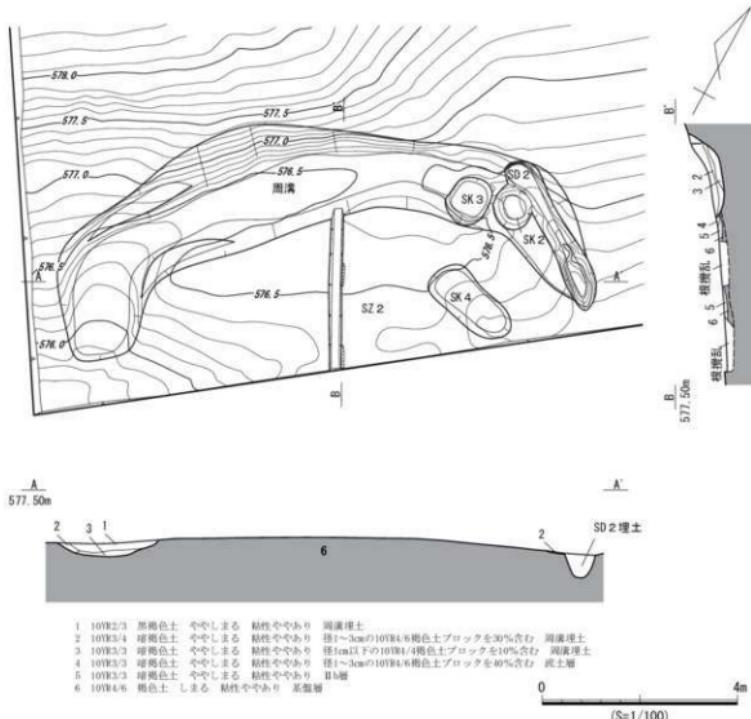
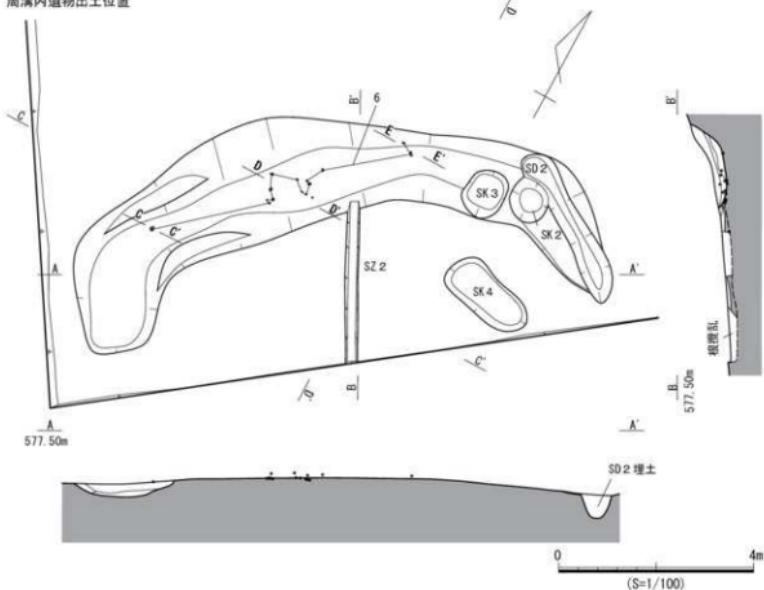


図12 SZ 2 遺構図(1)

周溝内遺物出土位置



周溝内遺物出土状況①



周溝内遺物出土状況②



周溝内遺物出土状況③



図 13 SZ 2 遺構図 (2)

途切れる。溝の各辺は直線的で、溝の断面は半円形に近い。傾斜に対して平行する方向の溝は墳丘側が直線的ではあるが、外側は丸みをもつ。溝の断面は逆台形状に近い。埋土は3層に分層した。各層の堆積は地形の傾斜上方の北側の堆積が厚い。いずれの層もII層に近い暗褐色土に基盤層に類似する褐色土ブロックを含む。周溝の幅は1.7m～2.4mであり、傾斜に対して平行する方向の溝の中央の幅が広い。深さは最大0.38mである。周溝内では遺構は確認できなかった。

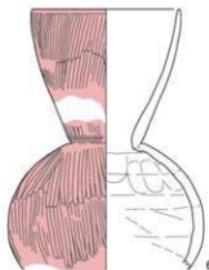
遺物出土状況 周溝内から縄文土器10点、須恵器1点、石器5点、土師器24点が出土した。縄文土器・石器・須恵器はa層・1層から散在した状態で出土している。これらの遺物は周溝が完全に埋没せず、窪地になった部分に流れ込んだものと思われる。弥生土器(6)は底面から若干浮いた状態で3層内を中心に出した。平面的には図13のように傾斜に対して平行する方向の溝の中央にまとまるが、東側や西側にも散在する。

出土遺物 6は弥生土器である。直口壺で口唇部は若干内傾する。外面全体にミガキ調整と赤彩が認められる。口縁部・頸部・胴部はタテ方向のミガキ調整であるが、口縁部と頸部の境の括れる部分の調整はヨコ方向のミガキ調整を施す。北陸地方の月影式から古府クルビ式にかけて、頸部と胴部の境に段差が形骸化し消失する現象が認められるが、6を頸部の段差が消失し横方向の調整のみ残す段階の資料と考えれば、白江式に比定できる。

時期 6は弥生土器は溝の底面付近で出土していることから、溝が次第に埋没する段階の資料と考えられる。6は北陸地方の白江式に比定できることから、SZ2は古墳時代初めの遺構と考えられる。重複関係にある1号古墳も、出土遺物から大きな時期差はないものと思われる。

注

- 1) 高橋浩二氏の御教示による。
- 2) 高橋浩二氏の御教示による。



0 10cm
(S=1/3)

図14 SZ2出土遺物

第5節 その他の遺構と遺物

SZ 1・SZ 2以外の検出した遺構の中から、溝状遺構1条、土坑1基、不明遺構1基を報告する。

1 溝状遺構

SD 2（図15・16）

検出状況 B 4 グリッド、SZ 2 の周溝の埋土上面で検出した。平面形は長楕円形である。検出時は周溝の埋土の一部の可能性も考えたが、掘方壁面が逆台形状になり、周溝よりも深くなることから別遺構と判断した。SD 1・SK 1・SK 2 と先後関係があり、SK 2 に先行し、SD 1・SK 1 より後出す。

埋土 黒褐色土と暗褐色土が2層堆積する。2層は基盤層に類似する褐色土ブロックを多く含む層であることから人為的な堆積の可能性がある。

遺物出土状況 弥生土器2点が1層から出土した。

出土遺物 7は弥生土器である。壺の胴部で外面に縦方向のミガキ調整を施す。胎土や調整は、1号古墳で出土した弥生土器（1）と類似する。

時期 弥生土器が出土しているが、先行する1号古墳やSZ 2 の遺物が混入した可能性があり、時期を特定できない。遺構の先後関係からSZ 2 より後出す遺構と考えられる。

2 土坑

SK 4（図15）

検出状況 B 4・C 4 グリッド、SZ 2 内のII b 層上面で検出した。平面形は楕円形で、長さ1.94m、幅0.81mである。検出時はSZ 2 の埋葬施設の可能性も想定したが、北側の周溝と長軸方位が合わないことや周溝との距離が近いこと、遺構の底面が地形に沿って傾斜することから埋葬施設とはしなかった。

埋土 暗褐色土の単層で炭化物を含む。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 出土遺物や遺構の先後関係がないため、時期を特定できない。

3 不明遺構

SX 1（図16・18）

検出状況 A 5～B 5 グリッドで検出した。1号古墳（SZ 1）の周溝を調査した際に周溝の南端で確認した遺構である。発掘区の南東側に下る傾斜地に立地する。1号古墳の周溝掘削後に周溝の東端の掘方壁面に基盤とは異なる暗褐色土の堆積が確認できたことから、1号古墳の周溝が続くと判断し掘削したが、B断面の観察から、9層上面が8層から連続する埴丘構築当時の地表面の可能性があり、SX 1 がこれよりも下層の遺構であるため、埴丘構築時期には埋没していたと判断した。また、A断面・B断面の観察からの傾斜下方においても掘方の立ち上がりを確認できたことから、基盤を掘り込んだ溝状の遺構と考えられる。

埋土 暗褐色土が4層堆積する。①・②・④・⑤層は、基盤層に類似する褐色土ブロックを多く含む層であることから、人為的な堆積の可能性がある。

遺物出土状況 繩文土器14点、石器3点が出土した。平面的にまとまりはないが、③層から④層から多く出土した。

出土遺物 8・9は縄文土器である。8は縄文時代中期前葉の深鉢の波状口縁頂部で口縁部外面に半截竹管による幅広の連続爪形文を施す。9は縄文中期の深鉢で胴部外面にR L縄文を施す。

時期 縄文土器が出土しているが、いずれも細片であり時期を特定できない。1号古墳埴丘構築時には埋没していることから、古墳時代初頭以前の遺構と考えられる。

4 遺構外出土遺物(図18)

10~12は縄文土器である。10・11は縄文時代中期前葉の北陸系の深鉢口縁部片で外面に半截竹管状工具による連続爪形文を施す。12は縄文時代中期前葉の浅鉢口縁部片で外面にR L縄文を施す。13~16はロクロ土師器である。13は皿、14は碗である。15は無台碗で底部外面に糸切痕が残る。16是有台碗で狭い高台が付く。17・18は古代の須恵器である。17は撫肩の長頸壺、18は甕の胴部片である。19は灰釉陶器の壺の底部である。20は龍泉窯系の青磁碗で外面に鎬連弁文を施す。21は下呂石製の無茎石鏃で剥片縁辺を中心に調整剥離し先端部や基部を作り出す。22はチャート製の石錐で錐部に微細な剥離痕を残す。23は流紋岩製の打製石斧で刃部表面に線条痕が認められる。24は流紋岩製の磨石・敲石類で表裏面には磨痕と凹部、上面は敲打痕、側面は敲打による摩滅痕が認められる。25は流紋岩製の石皿で平坦面に磨痕・線状痕が認められる。

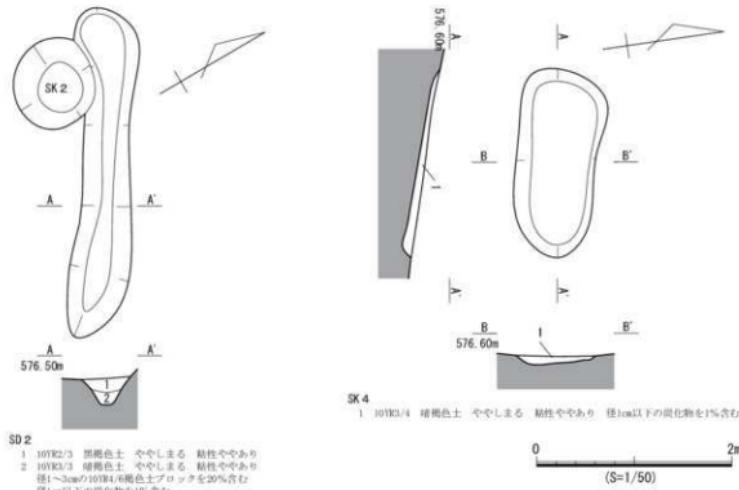


図15 SD2・SK4遺構図



図16 SD2・SX1出土遺物

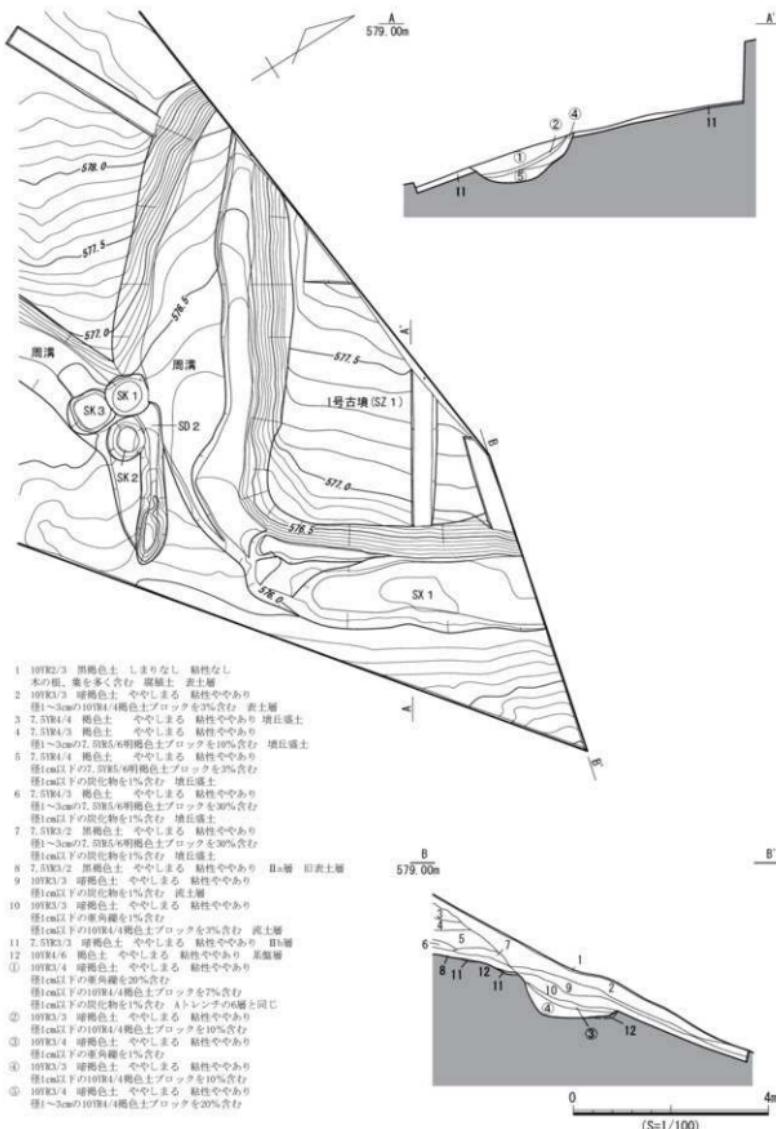


図 17 SX 1 遺構図

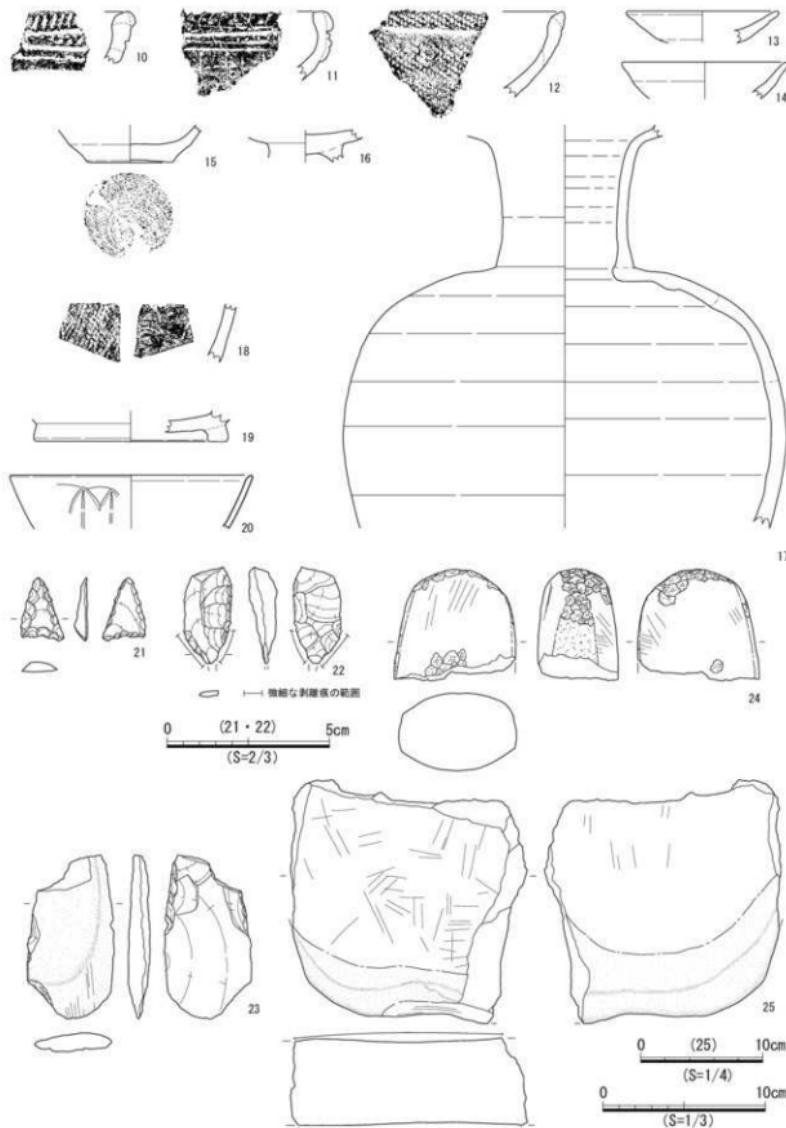


図 18 造構外出土遺物

表4 墳墓・方形周溝墓一覧表

遺構番号	調査番号	検出グリッド	検出面	堆積状況	断面形状	方形周溝墓の規模 (m)						長軸方位	重複関係		出土遺物	辨認	図版	
						内寸上端	内寸下端	底辺	外寸上端	外寸下端	深さ		前段	後段				
SZ 1	301(方巾形) 302(方巾形)	B1-B5 B2-B4 B3-B4	IIa上 IIa上 IIa上	b3 b3 b3	B2a1 B1a1 B1a1	(3.96) (3.60) (3.14)	(3.50) (3.50) (8.91)	(3.50)	-	-	(6.20) (4.50)	1.16 1.16	N39°W N39°W	SZ 2-周溝 SK 2, SK 3, S1-周溝 SD 2	- P, S P, S	J, Y J, Y J, Y	2 2 3	
SZ 2	305(方巾形) 306(方巾形)	B2-B4 C2-C3	IIa上 IIa上	b2 b2	B1a1	7.94	(3.14)	8.91	(3.50)	-	11.20 (4.92)	10.10 (4.50)	0.38 0.38	N29°W N29°W	SK 2, SK 3, S1-周溝 SK 1	- P, S	J, Y P, S	12 12

表5 周溝内土坑一覧表

遺構番号	調査番号	検出グリッド	検出面	堆積状況	断面形状	規模 (m)						重複関係		出土遺物	辨認	図版	
						上端			下端			深さ					
SZ 1-周溝内土坑	S17	B1	III上	b1	B1a2	1.50	0.61	1.35	0.49	0.19	0.12	-	-	-	-	11	2

表6 溝状遺構一覧表

遺構番号	調査番号	検出グリッド	検出面	堆積状況	断面形状	規模 (m)						重複関係		出土遺物	辨認	図版	
						上端			下端			深さ					
SZ 1	S14	B1	III上	a	B1a2	(1.95)	(1.87)	0.21	0.14	0.04	0.04	N40°W	SZ 2-周溝, SD 2	-	-	-	
SZ 2	S10	B1	III上	b1	B1a1	3.39	3.06	0.51	0.11	0.27	0.27	N57°W	SK 2	SZ 2-周溝, SD 1, SK 1	Y	15	-

表7 土坑一覧表

遺構番号	調査番号	検出グリッド	検出面	堆積状況	断面形状	規模 (m)						重複関係		出土遺物	辨認	図版
						上端			下端			深さ				
SK 1	S16	B1	III上	b2	A1a1	0.93	0.91	0.56	0.51	0.24	0.24	SZ 2-周溝, SK 3	-	-	-	-
SK 2	S08	B1	III上	b3	A1a1	0.93	0.88	0.45	0.49	0.25	0.25	-	SZ 2-周溝, SD 2	-	-	-
SK 3	S09	B1	III上	a	A1a1	1.01	0.82	0.69	0.66	0.04	0.04	-	SZ 2-周溝, SK 1	-	-	-
SK 4	S07	B1	III上	a	A1a1	1.94	0.81	1.68	0.79	0.11	0.11	-	-	-	15	-

表8 不明遺構一覧表

遺構番号	調査番号	検出グリッド	検出面	堆積状況	断面形状	規模 (m)						重複関係		出土遺物	辨認	図版
						上端			下端			深さ				
SX 1	S19	A5-B5	IIbF	b3	B2a1	(5.80)	(5.65)	2.10	0.95	0.60	0.60	SZ 1-周溝	-	J, S	17	3

表9 土器観察表(1)

出 土 器 物 番 号	種 別	出土位置		大きさ (cm)	(1)縦 径 横 径 底 盤 高	底 盤 存 在 率 (X/12)	胎 土	焼 成	色 調 (外 面) (断 面)	器 面 調 整 (内 面 外 面)	文 様	分 期 ・ 時 期	備 考	辨 認 番 号			
		遺 構 グ リ ッ ド 番 号	層 名								前	後					
1	仰生土器	直	SZ 1	丁層	-	-	(8.4)	-	黒 (径0.5~1mm 以下の長石。石 英を含む)	普通	101R7/6 101R7/6	ナデ ナデ・ミガキ	-	古墳初期 白江式	2・7と同一 個体2-	11	4
2	仰生土器	直	SZ 1	丁層	-	-	(L.7)	-	黒 (径0.5mm 以下の長石をわずか に含む)	普通	101R7/6 101R7/6	ナデ・ミガキエ ミガキ	-	古墳初期 白江式	1・7と同一 個体2-	11	4
3	單底器	直	SZ 1	①層 ②層 ③層	(14.4) (12.7)	3	-	黒 (径1mm以 下の長石をわずか に含む)	良好	81A/1 81A/1	回転ナデ ヘクナデ・回転ナデ	-	古代 8世紀後半	-	11	4	
4	圓文土器	圓底	SZ 1	⑤層	-	(2.7)	-	やや粗 (径1mm以 下の長石。石英 を多く含む)	普通	2.035/3 2.035/3	ナデ ナデ・突帯輪付	-	圓文中期	-	11	4	
6	仰生土器	直口	SZ 2	3, 4, 5層	(9.23) (16.1)	5	-	黒 (径1mm以 下の長石を含む)	良好	100R6/3 100R6/3	ナデナデ・指サエ・ナデ ミガキ(腹方向)	-	古墳初期 白江式	外面に赤彩	14	4	
7	仰生土器	直	SZ 2	a層	-	(2.2)	-	黒 (径0.5mm以下 の長石を含む)	普通	101R7/6 101R7/2	ナデ ミガキ	-	古墳初期 白江式	1・2と同一 個体2-	16	4	

表 10 土器観察表（2）

調査番号	種別	器種	出土位置		大きさ (cm)	口縁部 復元率 (X/12)	施土	焼成	色調 (外面) (断面)	器底調整 内面 外面	文様	分類 ・時期	備考	種 別 番 号	因 版 番 号
			遺構 グリッ ド名	層位 口唇 底盤 器底											
8	縄文土器	深鉢	SZ 1	⑤層	— (1.7)	—	粗 (径1mm以下の長石、石英、雲母を多く含む)	普通	7.5YR6/6 7.5YR6/6	ナデ ナデ	手縫竹管 状工具による漆縫 爪形文	縄文中期 初頭	—	16	4
9	縄文土器	深鉢	SZ 1	⑥層	— (2.1)	—	粗 (径1mm以下の長石、石英、赤色斑を多く含む)	普通	10YR7/3 10YR7/3	ナデ 縄文(BL)	—	縄文中期	—	16	4
10	縄文土器	深鉢	E2	I層	— (3.2)	—	やや粗 (径1mm以下の長石、石英を多く含む)	普通	10YR6/4 10YR7/4	ナデ —	手縫竹管 状工具による漆縫 爪形文	縄文中期 前葉	北陸系	18	4
11	縄文土器	深鉢	E2 TR 4	I層	— (4.2)	1	密 (径0.5mm以下の長石を多く含む)	良好	10YR8/3 7.5YR7/6	ナデ —	—	縄文中期 前葉	北陸系	18	4
12	縄文土器	鉢	R1	I層	— (5.7)	—	やや粗 (径1mm～2mm以下の長石、石英、雲母を多く含む)	普通	10YR7/4 10YR7/4	ナデ 縄文(BL)	—	縄文中期 前葉	—	18	4
13	クロコ土師器	皿	A5	I層	(9.2) (1.65)	—	密 (長石を含む)	良好	7.5YR7/6 7.5YR7/6	回転ナデ 回転ナデ	—	古代	—	18	4
14	クロコ土師器	皿	A5	I層	(10.2) (2.3)	2	密 (径0.5mm以下の長石、石英をわずかに含む)	普通	10YR6/2 10YR6/2	回転ナデ 回転ナデ	—	古代	—	18	4
15	クロコ土師器	無台 瓢	A5	I層	— (5.2) (2.3)	11	密 (径1mm以下の長石、石英をわずかに含む)	良好	7.5YR7/6 7.5YR7/6	回転ナデ 回転ナデ・回転糸切痕	—	古代	—	18	4
16	クロコ土師器	有台 瓢	A5	I層	— (2.0)	—	密	良好	10YR7/6 7.5YR6/6	回転ナデ 高台貼付ナデ	—	古代	—	18	4
17	須恵器	長頸 瓶	C2 B2 C2	I層	(25.8) —	—	密	良好	10YR6/1 10YR1/1	回転ナデ 回転ナデ・回転ケズリ	—	古代	—	18	4
18	須恵器	甕	B5	IIb層	— (3.0)	—	密	良好	N4/0 N4/0	平行タキ 圓心内タキ	—	古代	—	18	4
19	灰陶陶器	甕	A2	I層	— (1.9)	2	密	良好	10YR6/4 10YR8/2	回転ナデのち旋轉 回転ナデ・回転ケズリ	—	古代	—	18	4
20	青磁	皿	C2	I層	(15.0) (3.4)	1	密	良好	2.50Y7/1 2.50Y7/1	回転ナデのち旋轉 回転ナデのち旋轉	縄達弁文	中世前期	絆泉窯系	18	4

表 11 石器観察表

調査番号	器種	出土位置		石材	大きさ(cm)			重さ(g)	備考	種 別 番 号	因 版 番 号
		遺構 グリッ ド名	層位		長さ	幅	厚さ				
5	石核	SZ 1	5層	下昌石	3.4	3.8	2.1	14.5	芯面を残す。表面と裏面を作業面・打面を交替しながら剥離を行った。	11	4
21	石器	TR 1	I層	下昌石	1.9	1.3	0.3	0.8	回転無茎石器。	18	4
22	石椎	—	I層	チャート	(3.0)	1.4	0.2	3.0	椎部に微細な剥離を残す。	18	4
23	打製石斧	A2 TR 4	I層	波紋岩	10.1～ (5.3)	1.2	82.4	—	芯面を残す。基部欠損。	18	4
24	磨・藏石類	B1	I層	波紋岩	(6.9)	(7.5)	(4.8)	320	肩側・開部・鋸刃による摩滅を残す。半分以上欠損。	18	4
25	石皿	A3	I層	波紋岩	(20.0)	19.4	(6.6)	4000	平底面に瘤状・縦条痕を残す。	18	4

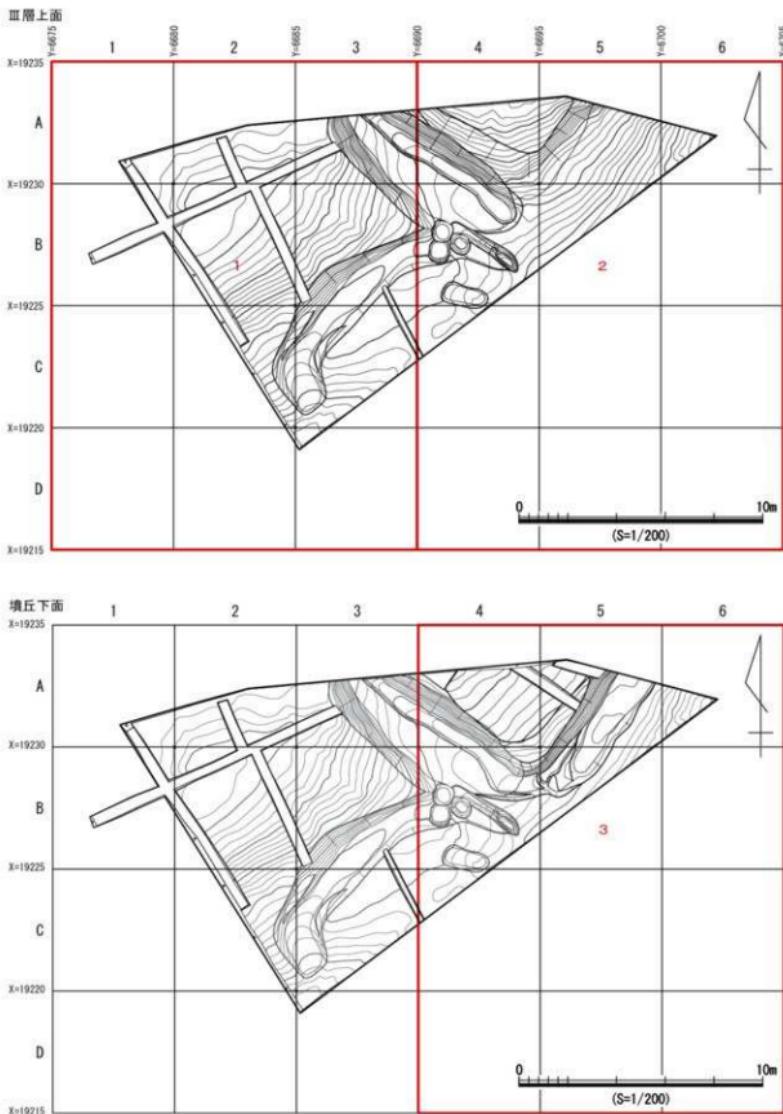


図 19 発掘区全城図割付図



図 20 III層上面発掘区全域図分割図 1

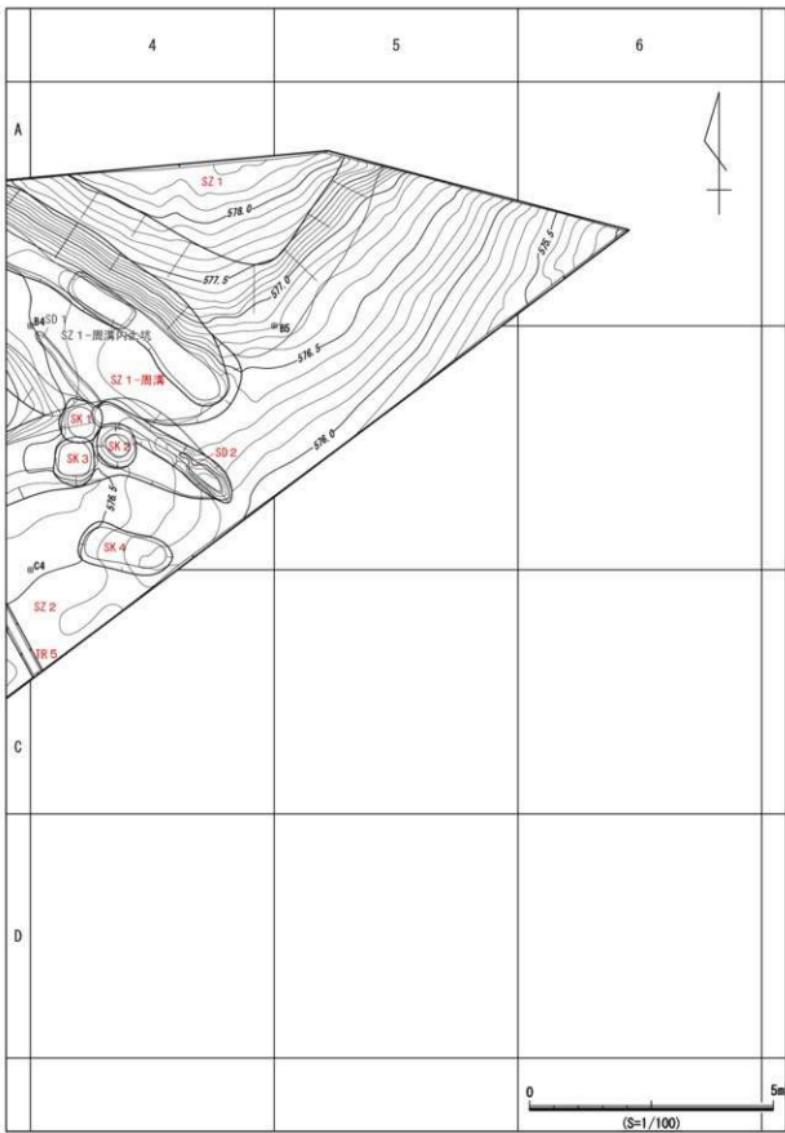


図 21 Ⅲ層上面発掘区全域図分割図 2



図22 Ⅲ層上面発掘区全域図分割図3

第4章 総括

今回の調査では中切上野1号古墳及び方形周溝墓(SZ2)を検出した(第3章第4節)。以下に、中切上野1号古墳と方形周溝墓の属性と地域における歴史的意義づけについて検討する。

第1節 遺構と遺物について

1 墓の規模・形態

飛騨地域(高山市・飛騨市・下呂市・白川村を含む範囲)では、上切寺尾古墳群¹⁾・中野大洞平遺跡²⁾や上町遺跡³⁾、ツルネ遺跡⁴⁾などで中切上野1号古墳群とほぼ同時期の墳墓・方形周溝墓が確認されているが、上切寺尾古墳群以外は墳丘盛土が確認されていない。今回検出した1号古墳は、墳丘盛土が残存しており、中切上野古墳群に近い丘陵部に立地する上切寺尾古墳群と同様に、残存状況が良好な墳墓といえる。また、1号古墳及び方形周溝墓(SZ2)は、溝によって平面形が方形(長方形)になるよう区画した構造をもつ。方台部の規模は1号古墳については北側が発掘区外となるため不明であるが、SZ2は内周規模が約8mあり、上切寺尾古墳群の墳墓の規模に近い値を示す。方台部の平面形は、1号古墳が方形、SZ2は1辺が丸味のある不定な形状であるが、方形に近い形状をとる。周溝の形態では、傾斜地下方側の周溝が認められないものである。上切寺尾古墳群では、斜面下方に周溝が認められない墳墓は丘陵の斜面に立地することから同様の特徴をもつ。

2 1号古墳の墳丘の構築について

今回検出した1号古墳の墳丘盛土は、旧表土や基盤層に由来すると考えられ、周溝掘削により生じた排土を構築土として利用した可能性が高い。墳丘の構築方法は、その土を方台部の周縁に堤状の盛土を行った上でその内部を充填するもので、傾斜地上方に周溝を掘削しつつ、方台部内の傾斜地下方に置き、最後に堤状の盛土内部を整地するという連続した工程を示している可能性がある。

3 出土遺物

今回検出した1号古墳及びSZ2の周溝底面付近で、完形に近い土器が出土した。現位置を保っていると考えられるが、底面から若干浮いた状況で出土していることから、周溝が若干埋没した状況で墳丘から転落した可能性もある。土器の器種は壺で、いずれも古墳時代初頭の白江式期である。

第2節 中切上野古墳群について

今回の調査において、周溝同土の重複を確認したが、その状況は上切寺尾古墳群の尾根上に展開する墳墓のように周溝を共有しながら並ぶのではなく、周溝の一部が重複したように見える。また、区画を共有するという意識は低く、傾斜を意識した向きで方向が揃い、密集度は低いものと考えられる。中切上野古墳群の立地する丘陵部では、平成30年度の中切上野遺跡の発掘調査⁵⁾で方形周溝墓1基、平成31年度の中切上野遺跡の発掘調査⁶⁾で発掘区内にある中切上野5号古墳の調査を行った。方形

周溝墓は出土遺物から1号古墳やSZ2と同じ古墳時代初頭に構築されたと考えられるが、他の周溝墓との周溝の重複は認めなかった。5号古墳は出土遺物がなく時期が特定できないが、傾斜地に低墳丘を構築し、傾斜地下方側の周溝が認められない1号古墳と同様の特徴をもつ。

最後に中切上野古墳群が生み出された背景について考察する。第2章第2節で述べたとおり、当古墳群の周辺では多くの発掘調査が行われているが、中切上野古墳群から見下ろす位置には古墳時代の集落は確認されていないため、造墓集団は不明である。上切寺尾古墳群においても高曾洞川の谷を挟む離れた位置で弥生時代後期後半～古墳時代初めの集落⁷⁾が確認されているが、隣接する場所では確認されていない。また、当古墳群と同じ丘陵の中切上野遺跡⁸⁾、丘陵下の中切日焼遺跡⁹⁾の調査でも当該期の集落跡を確認していない。そのため、居住地の候補としては、当古墳群丘陵下にある緩傾

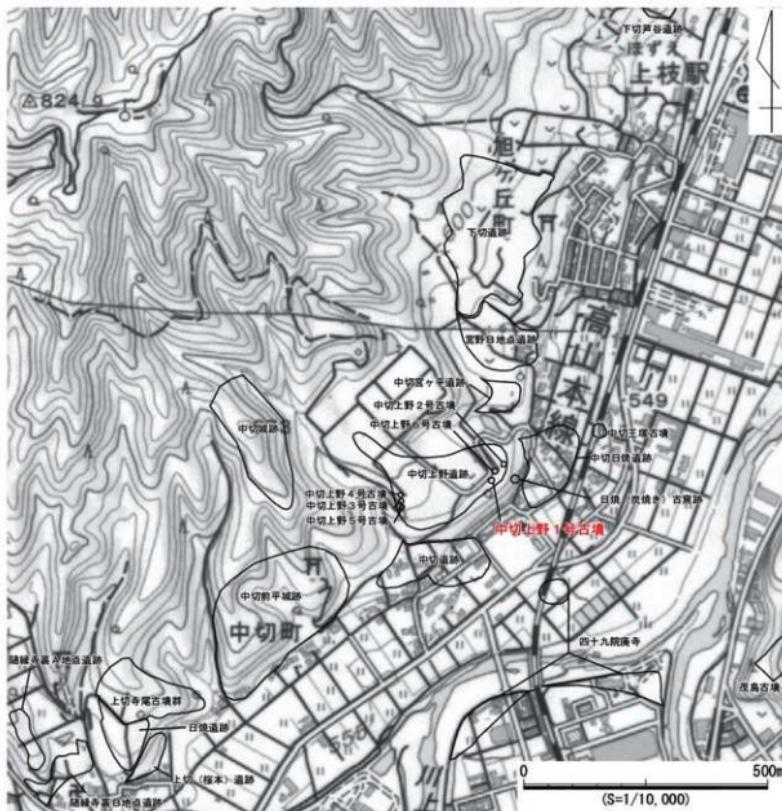


図 23 中切上野古墳群と周辺遺跡の立地

斜地があげられる。中切上野古墳群から見下ろす位置の緩傾斜地には中切日焼遺跡と中切遺跡がある。中切日焼遺跡の発掘調査では集落跡は確認されていないが、遺跡の一部分の調査である。また、中切日焼遺跡の南西側には縄文時代・弥生時代・奈良時代の散布地である中切遺跡が広がる。5世紀代の古墳である中切王塚古墳がこの緩傾斜地の末端に造られていることから、川上川の影響を受けることが少ない丘陵裾の緩斜面を居住地としていた可能性がある。

近年の調査で、本古墳群の西に位置する上切寺尾古墳群において弥生時代後期後半から古墳時代初頭の飛騨地域最多の51基の墳墓を確認した。今回の調査で、中切上野古墳群は上切寺尾古墳群と同時期か若干新しい時期の墳墓及び方形周溝墓であることが明らかとなった。今後は、飛騨地域における当時の集落と墳墓群の関係や、後続する古墳時代前期の墓制を明らかにすることが、大きな課題になると思われる。

注

- 1)岐阜県文化財保護センター2020『上切寺尾古墳群・日焼遺跡』
- 2)財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2006『西ヶ洞廐寺跡・中野山越遺跡・中野大洞平遺跡・大洞平5号古墳』
財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007『中野大洞平遺跡II』
- 3)古川町教育委員会1991『上町遺跡D地点発掘調査報告書』
- 4)高山市教育委員会1978『ツルネ遺跡発掘調査報告書』
- 5)岐阜県文化財保護センター2017『平成29年度中切上野遺跡現地見学会資料』
- 6)岐阜県文化財保護センター2018『平成30年度中切上野遺跡現地見学会資料』
- 7)弥生時代後期は野内遺跡D地区で堅穴建物が1軒、弥生時代終末期は野内遺跡B地区で3軒、C地区で2軒、古墳時代初めは赤保木遺跡で2軒を確認した（時期区分は本報告に合わせて記載）。
- 岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007『赤保木遺跡』
- 岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007『野内遺跡B地区』
- 岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007『野内遺跡D地区』
- 岐阜県文化財保護センター2012『野内遺跡C地区』
- 岐阜県文化財保護センター2017『平成29年度中切上野遺跡現地見学会資料』
- 岐阜県文化財保護センター2018『平成30年度中切上野遺跡現地見学会資料』
- 9)岐阜県文化財保護センター2020「3発掘調査 中切日焼遺跡」『令和元年度年報』

参考・引用文献

- 赤塚次郎2005「第1章第3節 時期区分」『愛知県史 資料編3 考古3 古墳』、愛知県
岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007『赤保木遺跡』(岐阜県文化財保護センター調査報告書
第105集)
- 岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007『野内遺跡D地区』(岐阜県文化財保護センター調査報
告書第108集)
- 岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007『野内遺跡B地区』(岐阜県文化財保護センター調査報
告書第111集)
- 岐阜県文化財保護センター2012『野内遺跡C地区』(岐阜県文化財保護センター調査報告書第122集)
- 岐阜県文化財保護センター2017『平成29年度中切上野遺跡現地見学会資料』
- 岐阜県文化財保護センター2018『平成30年度中切上野遺跡現地見学会資料』
- 岐阜県文化財保護センター2020『上切寺尾古墳群・日焼遺跡』(岐阜県文化財保護センター調査報告
書第154集)
- 岐阜県文化財保護センター2020「3発掘調査 中切日焼遺跡」『令和元年度年報』
- 小林達雄1988『繩文土器大観 第2巻 中期I』、小学館
- 小林達雄1988『繩文土器大観 第3巻 中期II』、小学館
- 財團法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2006『西ヶ洞庵寺跡・中野山越遺跡・中野大洞平遺
跡・大洞平5号古墳』(岐阜県文化財保護センター調査報告書 第198集)
- 財團法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007『中野大洞平遺跡II』(岐阜県文化財保護セン
ター調査報告書 第107集)
- 高橋浩二2000「古墳出現期における越中の土器様相—弥生時代後期から古墳時代前期前半土器の編年
的位置付け」『庄内式土器研究』XXII、庄内式土器研究会
- 高山市教育委員会1971『冬頭大塚古墳発掘調査報告書』
- 高山市教育委員会1975『飛騨国分寺瓦窯発掘調査報告書』
- 高山市教育委員会1978『ツルネ遺跡発掘調査報告書』
- 高山市教育委員会1990『飛騨国分尼寺発掘調査報告書』
- 高山市教育委員会1993『前平山稜遺跡 赤保木遺跡発掘調査報告書』
- 高山市教育委員会1995「1 赤保木5号古墳」『高山市内遺跡発掘調査報告書』
- 高山市教育委員会1998『中切上野遺跡発掘調査報告書』
- 高山市教育委員会2001「4 飛騨国分寺跡」『高山市内遺跡発掘調査報告書』
- 高山市教育委員会2005「4 赤保木8号古窯跡」『高山市内遺跡発掘調査報告書』
- 高山市教育委員会2005「10 平野遺跡・平野1号古窯跡」『高山市内遺跡発掘調査報告書』
- 田中彰2001『飛騨地域の古墳』『美濃・飛騨の古墳とその社会』、同成社
- 原田次郎2002「第4章 中部地方の土器」『考古資料大観2 弥生・古墳時代 土器II』、小学館
- 古川町教育委員会1991『上町遺跡D地点発掘調査報告書』

図版1 発掘区遠景・発掘区近景



発掘区遠景(南西から)



発掘区近景(南東から)

図版2 各遺構（1）



1号古墳周溝完掘状況（南西から）



1号古墳周溝土層断面（南から）



1号古墳周溝内遺物出土状況（南から）



SZ 1周溝内土坑完掘状況（南から）



1号古墳断ち割り状況（東から）

図版3 各遺構（2）



SZ 2 完掘状況（東から）



SZ 2 土層断面（北から）



SZ 2 周溝内遺物出土状況（南から）

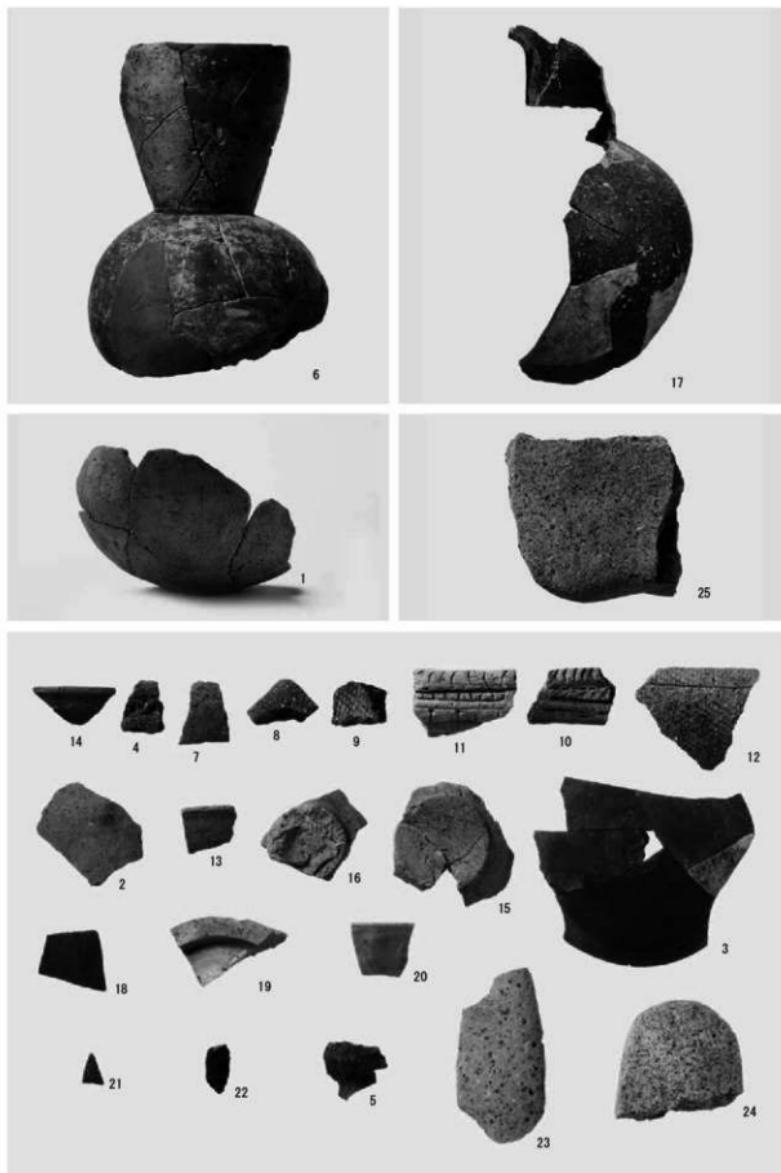


SX 1 土層断面（東から）



発掘区北壁土層断面（南から）

图版4 出土遗物



報 告 書 抄 錄

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第157集

中切上野1号古墳

2022年3月4日

編集・発行 岐阜県文化財保護センター

岐阜市三田洞東1-26-1

印 刷 株式会社もとすいんさつ